

もやしの唄

とき 一九六〇年代中頃

ところ 郊外にある小さなもやし屋 「泉商店」

登場人物 泉 恵五郎

泉 十子

泉 一彦

佐々木 とみ

高野 九里子

村松 幸雄

喜助

泉 静子

樋口 八重

* 佐々木とみ／泉静子／樋口八重の三役を一人の演者が兼ねる。

* 使用曲 『鉄道唱歌』第一集

舞台は古い小さな日本家屋の泉家。

母屋の茶の間には、ちやぶ台などのさきやかな家財道具と仏壇がある。

ギターが一本立てかけられている壁には、「水 一ねん三くみ いづみ かんた」というお習字に、朱で花丸のつけられた半紙が貼られている。

茶の間の正面から廊下を降りた中庭の上手側に、「泉商店」の古びた看板が掛けられた小屋がある。中はもやしの製造場である「室^{むろ}」と呼ばれる場所。

その手前にはポンプの取り付けられた井戸があり、汲み上げられた水は、もやしの小屋に運ばれる仕組み。

辺りには四斗樽^{しとだる}や桶が積み重なっている。

井戸の脇の洗い場で、村松と九里子がタワシで桶を洗つていて。テキパキと次々に桶を洗い上げていく九里子に対し、慣れない手つきでもたもたと作業する村松。

九里子 もっと力をいれないと、ぬめりがとれませんよ？

村松 はい。

九里子 こうです、こう！（とタワシで力強く桶をこすつてみせる）

村松 はい……！（と力いっぱいこすつてみる）

九里子 （仕事に集中しながら）お仕事にはもう慣れました？

村松 （早くも力尽きてしまい）……もやし作りにこれほど手間が掛かるとは知りませんでした……。

九里子 あたしも初めはびっくりしましたよ。温度からなにからあんなに気

を遣うなんて。

村松 もやしの室は摂氏30℃、湿度は80%に保たなければいけないそうですが……。

九里子 適当に水をやつておけば勝手に育つのかと思つてました。

村松 水遣りは六時間おきです……。

九里子 すぐ傷むんですって。ちょっとそれを怠つたりすると。

村松 一回の水遣りに二時間はかかります。いちいちボイラで沸かしたお湯と井戸水をあわせて、もやし好みの温度の水を作るんです。それを朝の六時と昼の十二時、夕方の六時と夜中の十二時に……。一体、いつ寝ればいいんですか？

九里子 おまけに明け方の三時には出荷の準備を始めるんですよ。

村松 室の中は暗いし、変な音はするし……。

九里子 ゴキブリじやありませんか？ もやしに毒だから殺虫剤が使えなくて、毎日戦いだつて聞きました。

村松 水を遣つて水を遣つて、洗つて量つて袋に詰めて……。

九里子 恵五郎さんは偉いですよ。幹太君を育てながら、立派に大変な家業を継がれて。

村松 （突然、がっくりと崩れ落ち）僕には無理です！

九里子 ……どうしたんですか？

村松 恵五郎さんのようにはとてもできません！

九里子 だつて村松さん、まだここに来て一週間じゃありませんか。

村松 何年いたつてあれほど熱心にもやしの面倒なんてみられません。第一、あんなに蒸し暑い所でみんなに長靴を履いていたら、足が臭くなってしまう！

九里子 きっとそのうち慣れますよ。

村松 足の臭いですか？

九里子 足なんて洗えばいいぢやないです。村松さん、慣れないお仕事で疲れてるんですよ。しばらく夜中の水遣りは勘弁してもらつたら……。

村松 ……夜中の水遣りはやつていません……。

九里子 え……？

村松 夕食の後は、朝の出荷の準備まで寝てていいつて……。僕が毎日、あまりにも疲れ果ててしまうもので、恵五郎さん、気を遣つてくださいって……。

九里子 そうなんですか……。

村松 ご自分だつてあんなに疲れているのに……。

九里子 あたしも心配なんですよ。恵五郎さん、しそつちゅう居眠りなさつてるでしょう？ 配達の途中に事故でも起こしやしないだろうかって……。

村松 申し訳ありません……。僕が不甲斐ないばかりに。

九里子 別に村松さんのせいじや……。

村松 ……僕のことを、なんてダメな男だと思つていてるでしょう？

九里子 思つてませんよ。そりやあ最初は、ラーメンを一本ずつ食べるなんて、変わつたお客様だなあとは思いましたけど……。

村松 ……時間を稼いでいたんですけど……。行くところがなかつたもので……。

九里子 よかつたですね。ちょうど泉さんのお宅で住込みの人を探してらしで。

村松 よくもこんな役立たずを紹介しやがつてと、責められたりしていませんか？

九里子 とんでもない！ よくぞあんな働き者を連れてきてくれたつて、感謝されているくらいです！

村松 ……誰が？

九里子 え……？

村松 誰が言つたんですか？ 僕のことを働き者だつて。

九里子 ……誰も言つていませんけど……多分みなさん、心の中では……。

村松 気休めはよしてください！ 僕なんてただの穀つぶしなんだ！

九里子 そんなこと……。

村松 だつてうつかりすると幹太君よりたくさん寝ているんですよ!..

九里子

村松でもまだ眠いんです!（突つ伏してしまって）

九里子村松さん。あとはあたしがやつておきますから、少しお部屋で横にならねばどうですか?

村松 （起き上がり）そうはいきません。高野さんだつてお店に戻らなければいけないのに。

九里子 あ、名前で呼んでください。みなさん、そうしてくださるので。

村松中華料理屋さんのお仕事だつて大変でしよう? どうしてまたこのお手伝いまで?

九里子 それはだつて、ほら、うちのお店は結構暇だし、いつも配達に来てくれる恵五郎さんがとてもお疲れのご様子だし、奥様を早くに亡くされて、まだ小さいお子さんにも手がかかるつて伺つたし、あたしでなにかお役に立てることがあればなあつて.....。

村松九里子さんは立派です。

九里子 そんな.....。

村松 それに比べて僕は.....。

茶の間で電話が鳴る。

九里子 （少しホツとして）あ! 電話ですよ。どなたもいらつしやらないのかしら?

九里子が茶の間に向かいかけると、奥から十子が出てきて電話に出る。

十子 （終始朗らかに）はい、泉商店です。あら、だいさく大作さん? お父さんの具合どう?そう、よかつたわねえ。お兄ちゃんはね、いま銀行。大変よ、最近は大きい工場にお客さんとられちゃつて。どうしてあんなに安

く出来るのかしら。もやしなんてただでさえ安くて手間ばつかりかかるんだから、値段の下げるようがないと思うんだけど。……ええ、こつちはみんな相変わらず。そういう、大作さんの代わりの人、見つかったのよ。村松さんて若い人。なにかねえ、お父さんの会社を飛び出して来ちゃったんですって。跡を継ぐのがイヤみたい。贅沢な悩みよねえ？……そうなの、お坊ちゃんなのよ。働いたことなんて全然なさそうな綺麗な手をしているの。色白でひょろひょろしていく、まさに「もやしつ子！」って感じよ！今度、写真撮つて送るわね。

九里子、十子と村松の双方を気にしながらオロオロする。

みるみるうなだれていく村松。

そこへカメラを首からぶら下げた一彦が帰つてくる。

一彦　ただいま。

十子　あ、一彦が帰つてきた。

一彦　誰？

十子　それじやあね。まだ暑くて大変だけど。ああ、そちらは涼しいわよね。

一彦　ね、誰？ 大作さん？

十子　え？ 夏は暑いの？ 盆地だから？ ふうん……。

一彦　代わつて代わつて！

十子　なんにしても体に気をつけてね。ご両親によろしく。それじやあ。（切
る）

一彦　なんだよ、代わつてつて言つたのに。

十子　だつて山形からじや電話代がかかつて悪いじやない。

一彦　どうせ姉ちゃんが一方的に喋つてたんじゃないの？

十子　お父さんの病気、よくなつたつて。

一彦　大作さんもついに農家の跡取かあ。一生食うには困らないだろうけど

なあ。

十子 そう言えばあなた、就職活動やつてるの？

一彦 （ふと庭に目をやり）九里ちゃん、写真撮つてあげるよ。

九里子 （必死に）村松さん、ほら！ 写真ですって！

村松 イヤですよ。山形に送られてしまう……。

九里子 （一彦に）村松さんも一緒にいいですかね？

一彦 ジやあ並んで並んで。（カメラを構えて）はい、撮りますよー。村松さん、もつといい顔色してー。はい、チーズ！（撮る）

九里子 ありがとうございました。

村松 これで山形でももやしつ子呼ばわりだ……。

九里子 村松さん……。

一彦 姉ちゃんも撮つてやろうか？

十子 そんなことより、六年も大学に行つたんだから、うんといい会社に入つてもらわなきや困るわよ？

一彦 二年も留年してたら、いい会社は雇つてくれないよ。

十子 あら、そーお？ ねえ、村松さん。いい会社つてそういうものなの？

村松 会社によるんじやないでしようか。

十子 そうよねえ！ 人より長く勉強した分、優秀だつて思つてくれるいい会社だつてあるわよねえ。

裏口から恵五郎が帰つてくる。

恵五郎 ただいま。

九里子 おかえりなさい。

十子 遅かつたじやない。

一彦 また車の中で寝てたんだろ。

恵五郎 うん。（洗い場にしゃがんで九里子から桶を受取ろうとしながら）いつもありがとう、九里子さん。あとは俺がやるからいいよ。松村さんもご

くろうさま。

村松 ……「村松」です。

恵五郎 ああ、そうか……。（寝てしまう）

九里子 あの……恵五郎さん？

恵五郎 （目を覚まし）ああ、いつもありがとうございます。九里子さん。あとは俺がやるからいいよ。松村さんもごくろうさま。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、そうか……。（寝てしまう）

一彦 ほつときや一生やつてるな。

十子 お兄ちゃん！ 起きてー！

恵五郎 （目を覚まし）ああ、ありがとうございます。松村さんもごくろうさま。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、そうか……。あとは俺が……。

九里子 （腕で恵五郎を引っ張り起こしながら）無理ですから！ 少し
お休みになつてください！（と、廊下に座らせる）

恵五郎 悪いね。じゃあ、ちょっとだけ……。

十子 （恵五郎に）さつき大作さんから電話あつたわよ。お父さん、退院しあつて。ねえ、お兄ちゃん知つてた？ 山形つて盆地だから夏は暑いんだつて。冬は屋根まで雪が積もるつていうのに大変よね。

恵五郎 ……。（寝ている）

十子 お兄ちゃん！

恵五郎 （起きて）お米のお礼、言つてくれた？

十子 （元気に）忘れた！

一彦 （映画雑誌を見ていて）あ！ 〇〇七の新しいヤツやつてる！ 姉ち
やん、一緒に観に行こうぜ！

十子 ダメよ。夕方から博さんと結婚式の打合せだもの。

電話が鳴る。

恵五郎 （出て）はい、泉商店です。毎度どうも。はい。

一彦 どうせただのデートだろ？ 吉田さんと三人で観に行こうよ。

十子 やあよ。結婚前の貴重な二人の時間を邪魔しないでちようだい。

恵五郎 （空いている方の耳を指で塞ぎながら）はい。明日がお休みで、明日四キロですね。はい、承知しました。（電話を切つてメモをとる）

一彦 結婚前の弟との時間が貴重だろ？ 世の中に男はごまんといふけど、弟は世界で俺一人なんだぞ？

十子 馬鹿ねえ、あたしと結婚してくれるのは世界で博さんただ一人なのよ？

一彦 うーん、それは説得力があるなあ……。

恵五郎 十子、お茶淹れて。（と座った途端、自動的にまぶたが下りてくる）

一彦 九里ちゃん、映画観に行かない？

九里子 これからお店があるので。

一彦 村松さんは？

村松 僕も仕込みが……。

一彦 じゃあ幹太だ。（恵五郎に）ねえ、幹太は？

恵五郎 （寝ている）

一彦 兄ちゃん！ 幹太は？

恵五郎 ……学校だよ。

一彦 ちえつ。あいつ、小学生のくせに真面目だなあ。

恵五郎 一彦、最近、大学行つてるか？

どこからか ♪汽笛一声新橋を♪と『鉄道唱歌』を歌う声が聞こえてくる。

一彦 あ！ 喜助さんだ。

喜助 （朗々と歌いながら庭先に現れ）あーたごのやーまに入ーりのこるー

つーきをたーびじの　とーもとしてー。

一彦　（庭に下りて）喜助さん、映画観に行こう！

喜助　田中絹代？

一彦　ジエームズ・ボンド。（ピストルを撃つ真似）

喜助　いやあ行かない。

一彦　（ため息）しようがない、一人で行つてくるか。（とそのまま出掛け

行く）

恵五郎　あいつ、友達いないのか……？

喜助　恵ちゃん、こんにちは。

恵五郎　いらっしゃい。

喜助　トコちゃん、こんにちは。

十子　喜助さんもお茶飲む？（廊下にお茶を二つ置き）九里ちゃんたちも休んで。お茶入ったから。

九里子　ありがとうございます。

喜助　九里子さん、こんにちは。

九里子　こんにちは、喜助さん。

喜助　（村松の顔をじっと見て）知らない人、こんにちは。

村松　（かなり面食らいながら）……こんにちは。

十子　あら、喜助さん、初めて？

恵五郎　（喜助に）こちらね、大作さんの代わりに今度新しく来てくれた松

：あれ？　村松？　松村？

喜助　村松村さん、こんにちは。

十子　あーあ、間違えて覚えちやつた。

恵五郎　（村松に）ずっと昔、うちを手伝ってくれた喜助さん。今も時々遊びに来てくれるんだよ。

喜助　（あらためてもう一度村松に）こんにちは。

村松　（応対に困つて）……歌が、お上手ですね。

喜助　（頷いて）『鉄道唱歌』。六十六番まで歌えるよ。（歌う）汽笛一声新橋

を（

電話が鳴る。

恵五郎 まあ上がつてよ（電話に出て）はい、泉商店です。

九里子 （歌い続ける喜助に人差し指を立てて）喜助さん、しーつ、しーつ！

喜助 （辺りを見まわし）幹ちゃんは？

十子 まだ学校よ。

喜助 （とても残念そうに）そうかあ……。

恵五郎 はい、四キロを二つですね。いつもありがとうございます。

喜助 ジやあ、帰ります。

十子 なんだ、幹太に会いに来たの？

九里子 （電話をする恵五郎を見つめていたが）あたしもそろそろ。（喜助に）

そこまでいっしょに帰りましょうか。

喜助 はい。

恵五郎 （電話を切り）喜助さん、もう帰るの？ ちょっと待って。もやし

持つていきなよ。（と、小屋の中へ入っていく）

喜助 はい！ ……。（村松を再びじっと見て）

村松 ……なんですか？

喜助 もやしみたい！

九里子 （ぎよつとして）喜助さん！

十子 そうでしよう？ うちのお店にぴったりよね！

九里子 （慌てて村松に）褒めてるんです！ 褒めているんですよ！ 村松

さん、色白でつやつやしてるから！

村松 ごちそうさまでした……。（と小屋へ向かう）

恵五郎 （もやしの入った袋を手に小屋から出てきて）なんだ松村さん、顔
色よくないね。

村松 生まれつきです。母が秋田の出身なんです。「村松」です。

恵五郎 ああ、本当に失敬。

村松 ……豆を洗つてきます……。（と小屋の中へ）

恵五郎 （見送つて）ムラマツ、ムラマツ……。どうして覚えられないのかなあ。

十子 お兄ちゃん、本当にダメよね。九里ちゃんのことも半年くらい「クニコさん」って呼んでたでしよう？

恵五郎 その節は大変失礼しました

九里子 いいんです、クニコでも九里子でも、お好きな方で呼んでいただければ。

恵五郎 （喜助に）はい、お土産。

喜助 （受取り）油でサツと。

恵五郎 そうそう。油でサツと炒めて食べてね。

喜助 ありがとう。さようなら。

恵五郎 また来てよ？

喜助 トコちゃんもさよなら。

十子 うん、またね。

九里子 失礼します。

恵五郎 気をつけて。

帰つて行く喜助と九里子を手を振つて見送る恵五郎。

十子 どんどん子どもにかえつていいくわね。

恵五郎 うん……。

十子 ……さて！ あたし、今夜出掛けちゃうけど、晚ごはんどうしよう？

恵五郎 吉田さん？

十子 えへへ。

恵五郎 どうしようつて、はなから作る気ないんだろう。

十子 えへへ。

恵五郎 今日はいいよ。お義母さんが来て晩飯作ってくれるって言つてたから。

十子 佐々木のおかあさん！ ありがとう！

とみ （玄関から声だけ）お邪魔しますね。

十子 噂をすれば！

とみ （買物かごを手に入つてきて）今、誰かお礼言つた？

恵五郎 いらっしゃい。

十子 （買物かごを受取り）ああ残念！ 佐々木のおかあさんのごはん食べられなくて。

とみ 全然残念そうじやないわねえ。吉田さんとお出掛け？

十子 お土産買つてくるわね！（と奥の部屋へ）

とみ 十子ちゃん、幸せそうね。

恵五郎 吉田さんに会う前からいつも幸せそうでしたけど、最近は度を越してますね。

とみ いいじゃないの、一番楽しい時期だわ。（仏壇に手を合わせる）

恵五郎 お寺さんには電話しておきました。あとは人数なんですけど……。

とみ うちの親戚はいいにしようかと思うの。みんな遠いし、年寄りばかりだし。

恵五郎 吉田さんはどうしようかな。

とみ お呼びしなくともいいんじゃない？ 静子を直接ご存じなわけじゃないでしよう。

恵五郎 ……じゃあ、うちも家族だけってことで……。

とみ （仏壇を眺め）……もう六年も経つのねえ……。

恵五郎 幹太が……小学生になりましたからね。（ギターを手に取り、爪弾き始める）

とみ 自分の娘の、七回忌に出ようなんて、夢にも思わなかつたわ。

間。

恵五郎は静かにギターを弾いている。

とみ 恵五郎さんには、本当に感謝しているんです。短い間だったけど、幹ちゃんみたいなかわいい男の子にも恵まれて、静子は幸せでした。

恵五郎 ……。

とみ だから……もういいんですよ。

恵五郎 ……。

とみ もし、いい方がいらしたら、どうぞいつしょになつてくださいね。

恵五郎 ……。

とみ ……再婚……考えていないの？

恵五郎 ……。

とみ 恵五郎さん？

恵五郎 ……。

とみ ……。（ため息）また寝ているのね……。

暗転。

誰もいない茶の間で電話が鳴る。奥から一彦が現れる。

二

一彦 （電話に出て）はい、泉です。ああどうも。はあ……。ああ、残高がねえ。……いや、引き落としが出来ないって言われても……。いま兄貴いないんですよ。ええ。俺じやわかんないから、帰つたら電話させます。はい。……はいはい、必ず、帰つたらすぐにね。はーい。

電話を切つて、ふとちやぶ台の上に目をやると、原稿用紙が一枚乗つ

ている。

一彦 お！宿題か？（と原稿用紙を取り、読み上げる）「ぼくのお父さん。ぼくのお父さんは、もやしやです。おいしいもやしをつくるために、まい日、いっしょうけんめいはたらいています。お父さんのおしりにはスイッチがあつて」……？「お父さんがすわると、そのスイッチがおさるので、お父さんはねむってしまいます。しごとがいっぱいあつて、スイッチもあつて、いつもいそがしいお父さんがときどきあそんでくれる」と、ぼくはとてもうれしくなります。ぼくは、お父さんが大すきなので、大きくなつたら、お父さんのようになりたいです。」……なるほどねえ……。

とみ（玄関から声）こんにちは。

とみが風呂敷包みを手に入つてくる。

とみ 十子ちゃんは？

一彦 どうせ買物だよ。電気洗濯機だ冷蔵庫だつて、毎日うるさい。頼まれていた浴衣の縫い直しが出来たのよ。

一彦 そんなことまでおばちゃんに頼んでんの？あれでよく嫁にいけるよなあ。知ってる？姉ちゃん、吉田さんのお母さんに「得意料理はもやし炒めです」って言いきつたんだよ？

とみ（仏壇に手を合わせてから）さぞ堂々と言つたんでしょうね。目に浮かぶようだわ。

一彦 この間、吉田さんが昼飯食いに来た時だつて、もやし炒めしか出さないもんだからさ、兄ちゃんが見るに見兼ねて味噌汁と卵焼き作つたんだぜ？もう心配だよ。

とみ これからはどんどん便利な道具が使えるんだもの。大丈夫よ。

一彦 僕が心配してるのは吉田さんの方ね。

とみ ああ。

一彦 仕事に疲れて帰つて来ても、姉ちゃんにもやししか炒めてもらえない
んじやないかって、俺は胸を痛めてるわけ。

とみ うまいこと言うわね。

一彦 おばちゃん、将棋やろうよ。（将棋盤を引っ張り出す）

とみ 私、よく知らないのよ。

一彦 （駒を並べながら）駒の進め方くらい知つてるでしょ？

とみ 本当にその程度よ？

一彦 充分充分！

一彦ととみ、将棋を指し始める。

とみ ……一彦君。

一彦 んー？

とみ お仕事、決まつたの？

一彦 んー……。

とみ お友達はみんな決まつてる時期じやない？

一彦 そうねえ……。

とみ ……そう言えば、一彦君は写真家になりたかったんだっけ。

一彦 ……俺、やっぱり映画監督になろうかなあ。兄ちゃん主役にしてさ、

「眠り恵五郎・水撒き殺法」なんてどう？

とみ ……。

一彦 ……。

とみ ……恵五郎さん、再婚する気ないのかしら……。

一彦 どうかねえ……。

とみ 誰かよさそうな方がいるつて話、聞かない？

一彦 聞かないなあ……。

間。

とみ ……幹ちゃん、お母さん欲しがつたりしていない？

一彦 してないと思うよ。

とみ ……寂しくないのかしらねえ……。

一彦 うちは賑やかだからなあ。ま、賑やかなのは姉ちゃんだけだけど。

とみ 十子ちゃんはお嫁に行つちやうじやない。

一彦 すぐ出戻つて来たりして。

とみ これ、縁起でもない。

十子 （玄関から声）ただいま！

一彦 ほら、出戻つてきた。

とみ およしなさいって。

十子が勢いよく茶の間に入ってくる。

十子 あら、佐々木のおかあさん、いらっしゃい！

とみ 浴衣、出来たわよ。

十子 わあ！ ありがとう！（将棋盤を覗き込み）あら、おかあさん、ほら、
その角！ 次で王手飛車取りじやない。

とみ そうなのよねえ……。

十子 （勝手に両者の駒を進め）はい、一彦の負け！

一彦 ああ！ なんだよ！

十子 （とみに）そうだ、ちようどよかつた。今、ワンピース作ってるんだ

けど、襟の始末がうまくいかないのよ。ちよつと見てくれる？

とみ それは構わないけど……（一彦に）なんだかごめんなさいね。

一彦 （片付けながら）いいの、慣れっこなの。

十子 （早速ワンピースを持ち出してきて）ほら、ここなんだけれどね……。

一彦 僕、腹減ったよ。お土産ないの？

十子 胡瓜がまだ残ってるんじゃない？

一彦 えー、胡瓜ー？

一彦、不満そうに台所へ。

とみ （ワンピースの襟元を見ながら） これは一遍ほどくようだわねえ。フ
アスナーのしつぽは見返しにはさまないと。

十子 そつか。ふんっ！（と力尽くでほどこうとする）

とみ （慌てて） 錘あるでしょう？ 持つてらっしゃい。

十子 はーい。

軽トラックの止まる音。

やがて、歌声とともに、喜助が豆の入った麻袋を持って、裏口から現れる。

喜助 はーるかに 見ーえし 富士の嶺はー はーや我がそばにー 来ーたりたりー ゆーきの かーんむり 雲の帶ー いーつも けーだかきすーがたにてー。

とみ まあまあ、お手伝いですか？

喜助 とみさん、こんにちは。

恵五郎 （同じく麻袋を抱えて現れ） 無理しないでよ、喜助さん。（十子たちに） 途中でばつたり会つてね、手伝うつて言つて聞かないんだ。一彦は？
十子 佐々木のおかあさんに将棋で負けて、へそ曲げてる。
とみ 悪いことしちやつたわねえ。

恵五郎 いいんですよ。あいつ、弱いんだ。「どうしたら勝たせてあげられる
かわからない」って、最近、幹太が悩んでる。

一彦 （台所から顔を出し） どうもろこしがあるじやん！（恵五郎に気づき）
あ、銀行から電話あつたよ。

恵五郎 うん、わかってる。いいんだ、今、寄つて來た。

一彦 あ、そ。（十子に）ねえ、あれ、茹でていいだろ？

十子 とうもろこしなんであつたつけ？

喜助 一ちゃん、こんにちは！

一彦 喜助さんも食べるよね？

喜助 はい。

恵五郎 それよりこっち頼むよ。

一彦 茄で終わつたらねー。（と再び台所へ）

恵五郎 （ため息。喜助がさっさと小屋に向かっているのに気づき）ああ！

ゆつくりね！足元、気をつけて！（と後を追う）

とみ ……喜助さん、お元気そうね。

十子 体の方はね。

とみ ……今日はなんのお買物だったの？

十子 電気洗濯機を見に行つたの。出始めの頃より、ずいぶん安くなつてたわ。

とみ そういう時代になつたのねえ。

十子 もう少し待つた方がいいのかしら。

とみ 手で洗つても破けてしまう服なんて、もうどこにもないんでしょうねえ……。

十子 カラーテレビはまだ手が出ないわ。

一彦 （茶の間に戻つてきて）カラーテレビまで買う氣でいたの？姉ちやん、玉の輿つてわけじやないんだからさあ。

もやし小屋の方でバタバタと騒がしい音。

やがて恵五郎に支えられて村松が、その横でオロオロしながら喜助が小屋から出てくる。

喜助 もやしさん！ もやしさん、しつかりして！

村松 （力なく）「村松」ですから……。

喜助 どうしよう。どうしよう……！

恵五郎 大丈夫だよ、喜助さん。軽い一酸化炭素中毒だから。

十子 あらやだ、大変。

恵五郎 涼しくなってきたから練炭入れといたんだよ。注意するの忘れてた。

（と、村松を廊下で休ませる）

村松 ちよつとくらくらしだけです……。

喜助 深呼吸、深呼吸よ、もやしさん！

一彦 また兄ちやんが酸欠でふらふら酔つ払いみたいになる季節かあ。もう秋だねえ。

十子 （一彦に）そうよ、もう秋なのよ？ 一彦、就職は？

一彦 （新聞を広げ）しまった、やぶ蛇だ……。

ヒミ ちゃんとお医者様にお連れしたら？ ほら、いつだつたか隣町のもやし屋さんが……。

恵五郎 ああ、同業者で時々いるんだよ。お湯が沸くまでちよつと一杯、なんて呑んだばっかりに、眠り込んでしまってそれつきりつてのが。

喜助 （村松を激しく揺さぶり）もやしさん！ 元気になつて、もやしさん！

村松 ……揺れると……気持ち悪い……。

恵五郎 （喜助を優しく制して）すぐ良くなるよ。（村松に）だから室の中ではあんまり長居しないようにな。

一彦 なにやつてたの？ 室の中での。

村松 妙な音が聞こえた気がして……。

喜助 心配いらないよ。大丈夫。もやはとつても利口だからね。

村松 時々聞こえるんです、あれは……。

喜助 もやは利口だよ。お天道様が当たらない真つ暗な室の中でだつて、自分がどつちに向かつて大きくなればいいか、ちやーんとわかつてゐるんだよ。

電話が鳴る。

十子 あたしかも！（ワンピースをとみに預け）はい、泉です。ああ！ どうだつた？ うん……うん……。（と、電話機ごと茶の間の外へ）

恵五郎 注文来るから、手短にな！

喜助 それからね、もやしはとつても忙しいんだよ。たつたの七日間で大きくならなくちやいけないからね。お腹を空かした子どもたちが待ってるからって、急いでいるんだよ。

村松 もやしは、大人もよく食べますが。

喜助 うん。でも、もやしが急いでいるのは子どもたちのためなんだよ。お腹を空かしているといけないからね。かわいそそうだからね。おいしいお水をたくさん吸つて、急いで大きくなるんだよ。とにかくとつても急いでいるからね、熱を出すの。

恵五郎 そうそう。放つておくと、自分が成長する時の熱で腐っちゃう。

喜助 だから毎日何度もお水をあげて、冷ましてあげなきやいけないよ。このお水がもやしのごはんにもなるんだからね。たくさんお水を吸つて、たくさん熱を出して、急いで大きくなるんだ。もやしは偉いよ。七日で立派に育つんだよ。早く子どもたちに食べてもらいたいんだね。お腹を空かして待つてるから。もやしは忙しいんだ。なんでも手伝つてあげなくちゃ。

村松 ……できる限り頑張ります……。

喜助 うん。（辺りを見回し）幹ちゃんは？

とみ （結局、ワンピースの縫い直しをしてやりながら）さつき、九里子さんと公園で逆上がりの練習していましたよ。

庭から九里子が現れる。

九里子 （横になつていてる村松を見て）村松さん！ どうしたんですか？

恵五郎 軽い中毒でね。

九里子 なにを食べたんです!! 吐いたやつた方がいいです!

ほら、口を

開けて! 早く! (と村松の顎をつかむ)

村松 (口に指を突っ込まれそうになるのを必死で防ぎながら) 食中毒じや

……ありませんから……!

一彦 酸欠だよ。一酸化炭素中毒。

恵五郎 休めば大丈夫だから。

九里子 ごめんなさい! あたしつたら……。

村松 (顎を押さえながら) 外れるかと思った……。

一彦 九里ちゃんは力持ちなんだよ。

恵五郎 この間も幹太を逆さにぶんぶん振って、喉に詰まつた飴を吐かせて
くれたんだ。

九里子 あの時は、つい夢中で……。

喜助 幹ちゃんは?

九里子 表で地面にお絵描きしています。

喜助 幹ちゃん、幹ちゃん! (と外へ)

村松 ……喜助さんは、子どもが好きなんですね。

恵五郎 うん。だから一彦のことも大好きなんだよ。

一彦 どういう意味だよ。

九里子 いつまでもお元気ですよね。今、おいくつでしたつけ。

恵五郎 六十は超えたんじゃないかな。

村松 (心底驚いて) ええーつ!

とみ そうよ、だつて喜助さん、明治のお生まれでしょう?

村松 ええーつ!

一彦 変わらないよなあ。

村松 四十そこそこにしか見えないじゃないですか!

一彦 僕が物心ついた時には、もう今とおんなじだったよ。

村松 (まだ信じられず) 六十……?

とみ 時計が止まつてしまつたのよ。

間。

とみ ……お子さんを、亡くされた時からね……。

間。

九里子 そうだ！ すみません、あたし、さつき勝手にお台所へ……。

一彦 ひよつとして、どうもろこし、九里ちゃんの？

九里子 ええ。

一彦 ごめん！ いま茹でてる！

九里子 いいんです！ そのつもりでお持ちしたんですから。

恵五郎 いつもありがとうございます、九里子さん。

九里子 八百屋さんが今年最後だからってたくさんおまけしてくれたんですよ。ためしにお店で「コーンラーメン」っていうのも出してみたんですけど、評判が悪かっただですよ。丼の底にどうもろこしの粒がたまつて食べづらいって。ですからほんとに……！

村松 （九里子に） ……もう、聞こえてませんよ。

九里子 （寝ている恵五郎を見て） ……ほんとだ……。

一彦 （新聞を見ながら） 兄ちゃん、カラーテレビ買わない？

恵五郎 （寝ている）

一彦 カラーでナイター中継見ようよ。幹太も喜ぶぜ、きっと。

恵五郎 （起きて） ……十子、まだ電話してるのか……？

一彦 兄ちゃん！

恵五郎 ……え？

一彦 カラーテレビ！

恵五郎 買わないよ。

一彦 長嶋の青——い髭剃り痕をカラーで見たくないの？

恵五郎 そんな理由で欲しがるの、おまえだけだよ。

とみ あんまり無理言つちやいけないわよ。十子ちゃんのお嫁入りでなにか

と物入りでしよう？

一彦 ジやあ俺も嫁に行く。

恵五郎 それよりも大学に行け。

九里子 （一彦に）どうもろこし、大丈夫ですか？

一彦 忘れてた。

九里子 あたし、見てきます。

九里子は台所へ。

入れ違いに十子が電話機とともに戻つてくる。

十子 はい、それじやあよろしく。（電話を切る）

一彦 長いよ！

十子 大事な用事なの！

とみ （十子に）はい、直りましたよ。

十子 あら！ もう？ さすがおかあさん。

とみ ついでに裾も纏まつつてしまふ？

十子 あたし、佐々木のおかあさんも連れてお嫁に行きたいわあ！

九里子 （台布巾を手に戻つてきて）もうちょっとでした。台布巾、お借り

しますね。

一彦 （村松に）じやあ待つてる間にひと勝負だね。（と将棋の準備を始める）

恵五郎 もう大丈夫かい？ 松村さん。

九里子 （小声で）「村松さん」ですよ。

恵五郎 そうだそうだ。

一彦 では一局！

十子 （村松に）弱いわよー。びっくりするほど弱いわよ？

村松

そんなに？

十子 ふざけてるのかと思うくらい！

一彦と村松、将棋を指し始める。

九里子、新聞を片付け、ちやぶ台の上を拭こうとして、幹太の作文に気づく。その内容に目を通すと、思わず微笑をもらし、原稿用紙をそつと畳んで茶箪笥の上に置く。

十子 そうだ、お兄ちゃん。箪笥買うのやめて電気洗濯機買うことにしたの。
いいかしら？

恵五郎 好きなように遣り繰りしてくれよ。

十子 問題は買うタイミングよね。どう思う？ 村松さん。

村松 （焦って）えつ……？

十子 もう少し待つたらもつと安くなるかしら？

村松 なる……んじやないですか？ どうしてそんなこと僕に？

十子 商売のことには詳しいんじやないの？ だって村松さんのおうちって、大きな貿易会社なんでしょう？

村松 ……はあ？

十子 炭鉱夫だったお父さんがひと山当てて、一代で大きな会社を作った石炭成金だつて。

一彦 へえ、初めて聞いたよ。

十子 お母さんは旗本の血を引くお嬢様で、お父さんとは大恋愛の末に結ばれたのよね？

村松 ……うちは製造業で、両親は見合い結婚ですが……。

十子 あら。おかしいわね。

一彦 姉ちゃん、勝手に話つくるなよ！

十子 博さんのお友達のことだつたかしら？

九里子 製造業つて、なにを作つているんですか？

村松 まあ……いろいろです……。

一彦 なんで家出しちゃつたんだっけ？

十子 町工場こうばで働く娘さんとの結婚を反対されたって言つたわね？

村松 そんなことひとかけらも言つていません……。

九里子 確か、お父様のやり方についていけないって。

十子 そうだ。そう言つてた。

一彦 覚えてないなら口はさむなって。

村松 そんなところです。もういいですよ、僕のことなんてそれくらいで。

とみ （居眠りしている恵五郎に） 恵五郎さん、お布団で休んだら？

恵五郎 ああ……。伝票の整理しないと。

九里子 お手伝いします。

十子 それで村松さんちのテレビはカラー？

村松 ……カラー……でしたね……。

十子 いいわねえ、カラーだつて！ 長嶋の青——い髭剃り痕が見られるのね！

恵五郎 ……もう一人いたか……。

一彦 九里ちゃん！ どうもろこしは？

九里子 いけない！（慌てて台所へ）

十子（村松に） 冷凍冷蔵庫は？ オーブントースターは？ 自家用車は？

村松 まあ……ひとつ通り……。

とみ 十子ちゃん。あんまり人のおうちのことを……。

十子 本物ね。本物のお坊ちゃんなんのね！

一彦 どうして会社継ぐのがイヤなのさ。俺が代わりに継いであげようか？

村松 ……一彦さん……。

一彦 ん？

村松 ふざけてる……わけじやないんですよね？

一彦 なにが？

村松 ……あの……王手、なんですけど……。

九里子　（茹であがつたどうもろこしを笊に載せて入ってきて）お待たせしました！

一彦　……。（静かに庭に下り、表に向かつて行きながら）幹太一、喜助さん、どうもろこしだぞー！

暗転。

三

同じく泉家の茶の間。

前場から唯一変化しているのは、「水」と書かれた半紙の下にもう一枚、大きく太い字で「村松」と書かれた半紙が増えていること。

ちやぶ台では恵五郎をはさんで村松と九里子が、それぞれ伝票の整理、領収書のハンコ押しなどをしている。

恵五郎はちやぶ台に突っ伏して、言うまでもなく眠っている。

九里子　（仕事の手を休め、眠る恵五郎を見て）……いつにもましてお疲れのようですね……。

村松　一日働き通しですからね。最近は十子さんもお出掛けがちで、家事もいろいろこなさなきやならないし。僕、恵五郎さんが布団で寝ているところ、見たことがありません。

九里子　夜中の水遣りも……相変わらず？

村松　まかせてくれないんですよ。寝てていいって。

恵五郎　（がばっと起き上がり）水！　水遣り忘れた！

村松　お昼の分は済んでいますよ。

恵五郎　そうか、よかつた……。（再び眠る）

九里子　……おでこに、算盤の痕が。

村松　ええ。くつきりと。

九里子　痛くないんでしょうか？

村松　眠気の方が勝つんでしょう。

九里子　心配です。

村松　……九里子さんは、いつも心配しているんですね。

九里子　え……？

村松　人の心配ばかりしている。

九里子　……暇なだけです……。

村松　暇とお金を有り余るほど持つても、他人のことなんてこれっぽつちも気にかけない人間を、僕は大勢知っています。

九里子　あたし、お金はありませんから。

村松　……ちょっとやらやましいです。そんなふうに心配してもらえる人が。

九里子　村松さんのことだつてあたし、いつも心配しているんですよ？　また室の中で倒れたりしていなかしら、寝坊していなかしら、足は毎日ちゃんと洗っているのかしらって。

村松　……それは心配しているんじやなくて、信用していないんでしょう……。

九里子　そんなことありませんよ！

恵五郎　（おでこをさすりながら起き上がり）……寝ちゃったな。

九里子　領収書には全部、ハンコ押せました。

恵五郎　ありがとう、九里子さん。（振り返つて壁の半紙を確認し）「村松」さんもご苦労様。

村松　……来月から、豆の発注を増やすというお話でしたが……。

恵五郎　これからだんだん涼しくなつてくると、ラーメン屋さんの分が増えるからね。

九里子　タンメンとかサンマーメンがどんどん出るようになるんですよ。

村松　差し出がましいことを言うようですが、設備の見直しをお考えになつた方がいいのではないでしようか。こちらのように樽でもやしを作る旧式

の方法では、生産能力の増強にも限界があります。思いきってオートメーション化なさってはいかがですか？ まずは散水機を導入するべきです。

設備投資は大きなご負担でしようけれど、長期的な視野に立つて予算を組んだ上で、販売管理を行えば……。

恵五郎 そうだね、（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんの言うことは最もだと思うけど……。

村松 技術革新が激しい現代で、市場での優位性を確保するためには、限られた経営資源を戦略的に配分することが不可欠なんです。効率の問題ですよ。……帳簿を見せてもらいましたけど、収益に対する製造過程の負担があまりにも……つまり、労力が掛かりすぎます！ 僕は自分が樂をしたくて言っているわけじやないんです。このままでは恵五郎さんが……！

恵五郎 うん、わかってる。（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんが心配してくれているのはよくわかるよ。

九里子 恵五郎さん、お席、替わりましょうか。そこ、後ろから風が来るでしょう？

村松 席替えの前に提案ですが、僕はこうして目の前にいるんですから、いちいち確認してまで名前を呼んでくださいなくとも……。

恵五郎 でも名前を呼ばないと、気持ちが伝わらないような気がしてね。

村松 充分伝わりますから。

恵五郎 幹太も一生懸命書いてくれたし。

九里子 （半紙を眺めて）幹太君、本当にお習字が上手ですよね。

村松 お気持ちはありがたいんですけど……。「村松」はそんなに覚えにくい名前でしようか。

恵五郎 うーん……（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんを見てると、

どうしても「松村」って言いたくなっちゃうんだよ。

村松 そうですか……。

恵五郎 ……さつきの、「効率の問題」だけどね。

九里子 お茶淹れましようか。お湯、沸かしてきますね。

九里子は台所へ。

そこへ喜助が歌声とともに現れる。

喜助 てーんかの はーたは とーくがわにー 帰ーせし戦の せーきがは
らー くーさむす かーばね いまもーなおー 吹ーくか いーぶきの
やーまおろしー。こんにちは。

恵五郎 いらっしゃい。

喜助 もやし、見てきてもいいかなあ?

恵五郎 うん、いいよ。練炭入てるから、ちょっとだけね。

喜助 ありがとう。(と小屋の中へ)

恵五郎 ……(村松に) なんの話だっけ?

村松 効率の問題です。

恵五郎 うん。練炭をバーナーに換えるつもりではいるんだ。やつぱり命に
関わるからね。

村松 僕が言つたのは、もっと抜本的な対策を……。

恵五郎 ……割に合わないってことはよくわかってるよ。いずれは機械の力
を借りなくちや、うちみたいな小さい店はやっていけなくなるだろうね。

村松 いざれなんてのんびり構えていられる状況では……。

恵五郎 でもね、俺はモノを作つてゐわけじやないから。

村松 もやしは立派な商品でしよう?

恵五郎 商品か……。

村松 もやしのような低価格商品で利益率を上げるために、まず量産です。

そのためにも日常業務の効率化を……。

恵五郎 (寝ている)

村松 恵五郎さん!

恵五郎 ……ああ、ごめん。

村松 (ため息) ……樂をしたいとは思われないですか?

恵五郎 ……音が聞こえるって言つたね。

村松 え？

恵五郎 もやしの室から、なにか音がするって。

村松 ええ……。あれは一体……。

喜助 （小屋から戻つて）ああ、楽しかつたあ。

恵五郎 ずいぶん早かつたね。

喜助 （きよとんと）もっと見ていいの？

恵五郎 五分やそこらは大丈夫だよ。

喜助 やつた！

村松 ……（小屋に向かおうとする喜助に）喜助さん。

喜助 はい！

村松 もやしを見るのが、どうしてそんなに楽しいんですか？

喜助 可愛いから！

と、喜助は再び小屋の中へ。

それを見送る村松。

恵五郎 ……楽しさなくたつて、楽しいことはあるよ。

村松 ……。

恵五郎 松村さんの言うように、商売だと割りきつてしまえばそれまでなんだけどね……。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、しまつた！（壁の半紙を振り返り）村松ね、む、む……む……

…。

と言いながら、「む」という口の形のまま眠つてしまう。

そこへ薬缶を手に戻ってきた九里子、村松に向かつて唇を突き出して
いる恵五郎を見て当惑。

村松 （慌てて） 恵五郎さん！ 九里子さんがお茶を！

恵五郎 ああ、ありがとう。そうだ、どこかに落花生があつたんじやないかな。（と台所へ）

九里子 お台所、少し冷えてきました。

村松 喜助さんが来ていました。

九里子 ええ、さつき「鉄道唱歌」が。

村松 ……もやしを見るのが楽しいそうです。

九里子 （微笑みでそれに応えてから） 村松さんは、優秀なんですね。

村松 は？

九里子 なんとかメーション、なんて難しい言葉がすらすら出てくるんですね。すごく堂々として、別人みたいでしたよ。きっと以前はこんなふうに、テキパキとお仕事をなさっていたんですね。

村松 ……。

九里子 あ、別に、今がテキパキしていないという意味ではなくて……。

村松 ……父みたいでしたか？

九里子 え？

村松 偉そうで強引で、人のことなんておかまいなしつて感じがしたでしょうか？

九里子 ……あたし、お父様のこと知りませんから……。

村松 ……そうでしたね。

そこへ紙袋を手に十子が帰つて来る。

十子 ただいま！ ああくたびれた。歩きすぎて足が棒みたいになつちやつた。ねえ九里ちゃん、知つてた？ 「足が棒になる」つて、棒みたいにこわばつちやうことを言うんだつて。あたし、棒みたいに細くなるんだと思つて、一日中歩き回つていた時期があるのよ。

恵五郎 （落花生を持つて戻り）ああ、おかえり。（小屋の方に向かって）お
い喜助さん！ いつしょに落花生食べよう！

十子 やっぱりオープンスターはまだ贅沢ね。代わりに魔法瓶を買って
きた。

恵五郎 別に代わりは買わなくたつていいんだぞ。

十子 次々に新しいものが売り出されるんだもの。目移りして困っちゃう。

九里子 ここ数年でお店もずいぶん増えましたよね。

喜助 （小屋から戻ってきて）トコちゃん、こんにちは。

十子 ねえ見て喜助さん、魔法瓶買ったの。喜助さんちには魔法瓶ある？

喜助 ううん、ないよ。うちにはね、なんにもない。

十子 やあねえ、戦時中みたいな暮らししてるんじゃないの？ 今度いつし
よにお買物行きましょうよ。

喜助 うーん……いい！

十子 あら、どうして？

喜助 買えないから。

九里子 はい、喜助さん。落花生の殻、剥けましたよ。

喜助 ありがとう。

十子 買えるわよー、ちょっとしたものだつたら。

喜助 （首をふり）売っているものしか買えないから。

十子 そんなの当たり前じやない。（九里子の剥いてくれた落花生を食べる）

恵五郎 十子。おまえは自分で剥きなさい。

村松 ……（つぶやくように）売っているものしか買えない、か……。

十子 お買物、楽しいのに。

喜助 もやし見てる方が楽しいよ。

十子 もう。お兄ちゃんとおんなりね。

九里子 喜助さん、一人でお住まいなんでしょう？ 不自由なことないです

か？

喜助 うん、なんにもないよ。

十子 嘘よお。洗濯機も冷蔵庫もなかつたら不便に決まつてゐるでしよう？
恵五郎 不自由と不便は違うだろ。

十子 お兄ちゃん、そんなことばかり言つてゐるから新しいお嫁さんが来てくれないのよ。ねえ？ 九里ちゃん。

九里子 えつ……！

そこへスースツ姿の一彦が帰つて来る。

一彦 あー、かつたるい。あー、馬鹿馬鹿しい。

喜助 一ちゃん、おかえりなさい。

一彦 ああ、こんちは。

十子 就職試験、どうだつた？

一彦 どうもこうもないよ。面接でいきなり「君は自分が優秀だと思ひますか？」つてこうだよ。

十子 あら、ずいぶん率直なのね。

一彦 優秀だと思つてたらおまえの会社なんか受けるかつて言うんだよ。

村松 そう言つたんですか？

一彦 いや。

喜助 一ちゃんはいい子だよ。

一彦 その通り。だから「はい」つて言つてやつた。

十子 なによ、それ。

一彦 あいつらが欲しがつてゐる「優秀な新人」つていうのは、ただの「いい子」つてことだよ。大したポカもやらず、くだらない会議で当り障りのないことだけ言つて、上司の指示通りに働く奴が「優秀」つて呼ばれんの！使い勝手のいい「駒」なら誰だつていいんだよ。あー、つまんねえ。俺、ネクタイ嫌いだ。（タイをはずしながら奥へ入つて行く）

十子 なに怒つてるのかしら。

村松 自分がまだ、駒にしかなれないって認めるのが悔しいんですよ。

十子 あの子、将棋下手だからねえ。

村松 ……そういう話では……。

恵五郎 あいつも大人になつたなあ……。

九里子 （立ち上がり）あたし、今日はこれで。喜助さんは？

喜助 幹ちゃん、まだ？

恵五郎 今日は友達のうちに行つちやつたよ。

喜助 そうかあ……。じやあ、帰る。

九里子 それじゃ、今度の日曜日に。

恵五郎 留守番なんて別にいいんだよ？ せっかくのお休みなのに。

九里子 いいんです。暇ですか。

恵五郎 なんだか悪いね。夕方には戻るし、（やはり半紙を確認し）「村松」さんはいてくれるからね。

九里子 はい。

恵五郎 いつもありがとうございます。

九里子 ……。失礼します。行きましょう、喜助さん。

喜助 さようなら！（と帰っていく）

十子 またね！ さーて着替えてこよーっと。（と奥へ）

村松 （片付けようとする恵五郎に）あ、ここは僕が。

恵五郎 そう？ ジやあボイラーレ火入れてくるよ。

村松 はい。

恵五郎 （立ち去りながら）ざつとでいいからね、松村さん。

村松 ……。（壁の「村松」の字を見つめ）「松村」か……。

村松、落花生の殻を片付け台所へ。

無人の茶の間で電話が鳴る。

着替えながら慌てた様子で入つて来た十子、電話に出る。

十子 はい、泉です……ああ、あたし！ うん、大丈夫。こつちは任せてお

いて。

暗転。

四

暗闇の中からギターの音色。

やがて、ぼんやりと泉家の茶の間が浮かび上がる。

そこにはギターを弾いている恵五郎と、おくるみの赤ん坊を抱いてあ
やしているいる静子（とみと二役）。

茶の間の壁からは一枚の半紙が消えている。

恵五郎 あ！ 笑った笑った。

静子（赤ん坊に） そう、楽しいの。よかつたねえ、幹太。

恵五郎 急に熱出したからびっくりしたよ。

静子 お父さん、びっくりしたつて。でも平気よねえ。幹太はお父さんに似
て、丈夫ないい子だもの。

恵五郎 ……疲れたろう、静子。代わろうか。

静子 大丈夫よ。

恵五郎 ほら、幹太！ 父ちゃんどこおいで。

静子 お母さんのどこがいいよねえ？

恵五郎 するいぞ、自分ばっかり。

静子 だつてせつかくご機嫌なんだもの。

二人、赤ん坊の顔を眺める。

恵五郎 親父とお袋にも見せてやりたかったなあ。

静子 本当ね。

恵五郎 さて、そろそろ水遣りの時間だ。

静子 近頃、注文が増えたから大変でしょう。

恵五郎 どんどん育てて稼がないとな。

静子 ……幹太ももやしみたいに、どんどん大きくなるといいのに。

恵五郎 それじゃ一週間で大人になっちゃうよ。

静子 ……早く見たいのよ。この子が大きくなつたところを……。

そこへ学ラン姿の一彦が、首から下げたカメラを大事そうに抱えて入つてくる。

一彦 静子義姉さん、見て！ 友達の兄貴から安く譲つてもらつちやつた！

静子 あら、よかつたわねえ、一彦君。

恵五郎 ずっと欲しがつてたもんなあ。

一彦 三人でいるとこ撮つてあげるよ！ 兄ちゃん、もつと寄つて！ はい、チーズ！

シャッターを切る音とともに、辺りが暗くなる。

再び明るくなると、壁に一枚の半紙が貼られたいつもの泉家。

その茶の間で、九里子がハタキを小脇に抱えたまま、アルバムに見入つている。

小屋から村松が現れ、空になつた麻袋の埃をはらう。

村松 （アルバムを見ている九里子に）なに見てるんですか？

九里子 （我にかえつて慌てて）違うんです！ あの、ハタキを掛けていたら、アルバムが棚から落ちてしまつて！ 偶然開いたところに幹太君の赤ちゃんの頃の写真が……！

村松 へえ、どれどれ。（とアルバムを見る）

九里子 村松さん、桶はもう洗いましたか？ なにかお手伝いしましょ
うか？

村松 これが静子さんか。お母さんとよく似ていますね。

九里子 みなさん、そろそろお戻りになる頃かしら？

村松 優しそうな人だ。

九里子 ……。本当に。

村松 （ページをめくり）この渾^{はな}たらして男の子、一彦さんじやないです
か？ ああ！ 隣に喜助さんがいる！（アルバムを差し出し）見てください
い、今とまったく変わつてない！

九里子 （アルバムを取り上げ）村松さんは変わりましたね。

村松 え？

九里子 あんなにお仕事を大変がっていたのが嘘みたいじやないですか。

村松 大変ですよ、今だつて。

九里子 でも、眠いとか、暑いとか、変な音がして怖いとか言わなくなりま
したよ。

村松 怖いなんて言つていません。ただ、妙な音がするなあつて……。

九里子 ゴキブリじやなかつたんですか？

村松 ええ。もつと控えめで……不思議な音です。

九里子 お化けだつたりして。

村松 （声が裏返るほど興奮して）やめてください！ お化けなんているわ
けないじやないですか！

九里子 ……村松さん……お化けが怖いんですか？

村松 父のせいです！ 父はどんなに帰りが遅くなつても、寝て いる僕を叩
き起こして毎晩、妖怪の話を……！

九里子 村松さんことを可愛がつていらしたんですね。

村松 ……面白がつていただけです。

九里子 ……もう、お家に戻るつもりはないんですか？

村松 跡を継ぐ気がないなら出て行けと言われましたから……。

九里子 本心からおっしゃったんじゃないでしょうか。

村松 「出て行けえつ！」って言われたんです。

九里子 言い方の問題でもないと思いますけど……。

村松 ……ここにいては迷惑でしようか。

九里子 村松さん、悪い癖ですよ？ そんなはずないじやありませんか。迷惑って言うならあたしの方こそ、頼まれもしないのに留守番だなんて上がりこんで、そっちの方がよっぽど……！（急に元気をなくし）やっぱり、ご迷惑だったでしようか……。

村松 ……どうしたんです？

九里子 そうですよね……。こちらには一彦さんも十子さんもいらっしゃるんだし、とみさんだつてなにかとお家のことをなさつてるし、なにもあったしがでしやばらなくたつて……。

村松 なに言つてるんですか。一彦さんが気持ちのいいくらい家のことをしないのは知つているでしよう？ 十子さんだつて、結婚を控えて家電製品のことでの頭がいっぱいだし。九里子さんがいなかつたら、泉商店はどうなると思います？

九里子 案外、うまくいくんじやないでしようか……。

村松 いつもの九里子さんらしくありませんよ。

九里子 あたしみたいなのがうろちよろしてたから、恵五郎さん、いつまでたつても再婚できないって……。

村松 誰がそんなこと言つたんですか？

九里子 昨日、夢の中で長嶋選手が……。

村松 ナイター中継の見過ぎです！ そんなこと気にしないで、九里子さんはいつも通り明るく元気に……！（なぜか言葉につまる）

九里子 ……？

村松 ……恵五郎さんを、支えてあげればいいじやないですか。

喜助が「鉄道唱歌」を歌いながら現れる。

喜助 東一寺の塔を 左にてーとーまれば七条スートーションー 京都
京都と呼びたーつるーえーきふの声もーいーさましやー。……もやし
さん、どうしたの？

村松 え？

喜助 寂しそう。

村松 そんなことないですよ。

喜助 遊んであげようか？ もやしさん。

村松 ……せめて「もやし屋さん」と呼んでもらえないでしようか。

喜助 （悩みに悩んで）うーん、もやし屋さんは恵ちゃんだからなあ……。

村松 そりやあそうですけど、なにもそんなところで筋を通さなくとも……。

僕だつて従業員なんですよ？

喜助 もやしさん。

村松 「屋」を入れるだけなのに。

九里子 喜助さん、この方のお名前はね、（壁の半紙を指さし）ほら、あそこ
に書いてあるでしよう？

喜助 （見て）……水？

九里子 そっちじやなくて……。

村松 ……もういいです。また名前が増えてしまう……。

喜助 なにして遊ぼうか、もやしさん。

村松 村松村さんと呼んでくれたこともあったのに……。

九里子 将棋がありますよ？ 喜助さんは将棋、お好きですか？

喜助 はい！

九里子 あたし、お掃除終えてしましますね。

喜助 （駒を指しながら）将棋はね、先を読むことが大事なんだよ。

九里子は箒を取り出し掃き掃除を、村松と喜助は将棋を指し始める。

村松 ええ。

喜助 ここに置いたらどうなるだろう、相手はどう出てくるだろうってね。

村松 はい。

喜助 心を読むんだ。相手の身になつて考えるんだよ。

村松 はあ……。

喜助 わかつたかい？ ユキオ。

村松 え？

喜助 そうすれば、ユキオだつてうんと強くなれるからね。

村松 どうして……。

玄関から喪服姿の恵五郎が帰つてくる。

恵五郎 ただいま。ああ九里子さん、掃除なんていいのに。喜助さん、いらっしゃい。

喜助 こんにちは。幹ちゃんは？

恵五郎 今、表でおばあちゃんに飴細工買つてもらつてるよ。

喜助 行つてくる！（と外へ走つていく）

恵五郎 （村松に）ああ、ごめん。途中だつたよね。

村松 それはいいんですけど……。

一彦 （すっかり着崩した喪服姿で入つてきて）あ！ なによ、村松さん。待つてくれればお相手するのに。（と将棋盤の前へ座る）

村松 さつき喜助さん、僕の名前を……。

恵五郎 名前？

村松 ええ、ユキオつて。

恵五郎 松村さん、ユキオつていうんだつけ？

村松 ……ええ。

九里子 （小声で）恵五郎さん！（と壁の半紙を指差す）

恵五郎 （半紙を見て）……ダメだなあ。

一彦 そりや偶然だね。

村松 偶然？

一彦 喜助さんの子供もユキオって名前なんだよ。将棋やつてると思い出すみたいでさ、誰でもユキオにされちゃうの。俺もよく言われるよ。「わざわざ負けるような手を指して、どうしたんだ、ユキオ」って。

九里子 亡くなられたんですね？

恵五郎 幹太ぐらいの年にね。

九里子 戦争で？

恵五郎 戦争、と言えば戦争だね。この辺りじや、空襲よりも終戦後の食糧難で飢え死にした子どもの方が多かったんだ。

九里子 お気の毒に……。

恵五郎 ……そうか、生きていればちょうど（チラッと半紙を確認）「村松」さんと同じくらいか。

一彦 木の枝削つて、将棋の駒を作つてやつたらしいよ。喜助さん、優しい父ちゃんだったんだろうな。

そこへ黒いワンピース姿の十子が帰つてくる。

十子 なあに？ まだ着替えてないの？

一彦 ああ、せつかくのいい話が……。

十子 お兄ちゃん、さつきの話、いいわね？

恵五郎 困るよ、そんなこと言われても。

十子 お仲人さんから是非についてお話をなのよ？ 断つたりしたら博さんが困るんだから！

恵五郎 （村松に）ボイラーア入れてくれた？

村松 はい。あとやつておきますよ。

恵五郎 ジやあお願ひしちやおうかな。

十子 聞いてるの？ お兄ちゃん。

恵五郎 着替えてくる。（と奥へ）

十子 ちよつとお兄ちゃん！（と追いかける）

村松 （二人を見送り、一彦に）なんの騒ぎですか？

一彦 見合い見合い。

九里子 えつ！

一彦 相手も再婚……いや、三度目つて言つたかな？ とにかく男運がない人らしいよ。子どもがいようが金がなからうが、誠実な人ならなんでもいいんだつて。で、めぐりめぐつて、子どもがいて金のない兄ちゃんに白羽の矢が立つたと、こういうわけだ。

九里子 そうですか……。

動搖を隠せない九里子、無秩序に辺りを掃き散らかす。

そんな九里子が気に掛かる村松。

そこへ喪服姿のとみが帰つてくる。

とみ 二人で公園にいつちやつたわ、飴を舐めながら。

一彦 （とみに）だけどさあ、なにも静子義姉さんの七回忌に、見合い話なんて持ち出さなくともいいと思わない？

とみ ちようどいい区切りじゃないの。静子にもきちんと報告できるし。（仏壇に手を合わせる）

一彦 姉ちやんにはデリカシーツものが欠けてるよ。

とみ 恵五郎さんだつていつまでも独りつてわけにはいかないでしよう。

一彦 ドライだねえ、女性陣は。……九里ちゃん。

九里子 はいっ！

一彦 （むせながら）埃がすごいんだけど。

九里子 ごめんなさい！

見合い写真を手に、十子がものすごい形相で戻つてくる。

十子 お兄ちゃんは!?

一彦 着替えてんだろ?

十子 いないのよ! 逃げたわね。

村松 恵五郎さん、乗り気じやなさそうでしたよね……。

十子 写真を見れば気が変わるわよ。

十子、見合い写真を開いて見せる。

その場の四人、写真を覗き込む。

とみ、そして一彦の顔色が変わる。

一彦 ……嘘だろ?

十子 横口八重さん。ね? そつくりでしよう?

静子お義姉さんに。

一彦 おばちゃんの親戚?

とみ いいえ……。

十子 こんないい縁、二度とありっこないんだから。お兄ちゃんには、首に縄をつけてでも会つてもらいますからね!

九里子 (筹を片付け) あたし、これで失礼します……。

十子 お留守番ありがとうございます。九里ちゃんにも今度、いい縁談があつたら紹介してあげるわね。

一彦 迷惑だよなあ? 九里ちゃん。

九里子 お邪魔しました……。

村松 (帰っていく九里子に) 九里子さん! 長嶋になにを言われても、気

にしちゃダメですよ!

一彦 なに? 長嶋つて。

村松 なんでもありませんけど……。

喜助 ただいま! ……九里子さん、どうしたの? 寂しそう。

九里子 さようなら、喜助さん…… (退場)

喜助 さようならー！

とみ (喜助に) 幹ちゃんは？

喜助 恵ちゃんと銭湯に行つちやつた。

十子 もう！ お兄ちゃんてばー！ (奥へ行きながら) 一彦！ とつとと着替えなさい！ 紋になつちやうでしょ！

一彦 僕に八つ当たりするなよ。 (と奥へ)

喜助 (にこにこと) トコちゃん、こわーい。

とみ ねえ、喜助さん。ちょっとこれ見てください。 (と写真を見せる)

喜助 だあれ？

とみ 恵五郎さんのね、お嫁さんになるかも知れない人。

喜助 ふーん。

とみ ……誰かに似ていると思います？

喜助 ……わかんない！

とみ そう……。

喜助 静子さん、元気？

とみ え？

喜助 静子さん、元気かなあ。

とみ ……多分ね、今はもう。遠い所で元気にしていると思いますよ。

喜助 よかつた。静子さんの煮物、おいしいね。時々くれたの、とつてもおいしかった。

とみ うちにカボチャを煮たのがありますけど、喜助さん、召し上がる？

喜助 はい！

とみ ジやあ、ちょっと寄つていつてくださいな。 (村松に) みんなによろしく言つてくださいね。

村松 はい。

喜助 もやしさん、さようなら。

村松 ……ユキオですよ。

喜助 ん？

村松 いえ……。さよなら、喜助さん。

喜助 さようなら！

とみと喜助、帰っていく。

一人残された村松、アルバムを出してきて、見合い写真と見比べる。
そこへ電話が鳴る。

村松 （出て） 泉商店です。……あ……。どうしてここが……。ええ、ちやんと食べていますし、体はなんとも。……わかりました。わかったから、もう掛けてこないで。……こっちから必ず、うん……。わかってるよ、お母さん……。大丈夫ですか……。

十子が茶の間に入つてくる。

村松 （慌てて） それでは！（と電話を切り） 間違い電話でした！

と、取りつくろうやいなや、さらにあたふたとアルバムや見合い写真を片づけ始める。

そんな村松を不思議そうに十子が見つめる中、暗転。

五

泉家の茶の間。

とみが幹太のズボンに継ぎあてをしている。

一彦は電話で話をしている。

一彦 わかりました。そう伝えておきます。それじゃ。（切る）

とみ 注文？

一彦 ついぶん買い叩かれてるみたいだな。機械で大量生産されたもやしが安く出回るようになつたからね。

とみ スーパーマーケットなんていう大きなお店も増えているし、小さいところはこれからどこも厳しいんでしょうね。

一彦 泉商店も、いつまでもつことやら。

とみ ……就職、まだ決まらないの？

一彦 返事待ち。多分、ダメじやない？

とみ そんなのんきなこと言つて。少しは恵五郎さんの力になつてあげなきや。

一彦 兄ちゃん、どうなつたかな。

とみ ……一彦君もついていつたらよかつたのに。

一彦 僕が見合いするわけじやないもん。

とみ お義姉さんになるかもしれない人よ？

一彦 僕の予想では、兄ちゃんはきっと……。

とみ ……なあに？

一彦 寝てるね。

とみ まさか。

一彦 絶対寝てる。十分以上目を開けて座つてられっこないよ。なにしろ兄ちゃんの尻にはスイッチがついてんだから。

とみ スイッチつて？

一彦 あれ？ 幹太は？

とみ 九里子さんのところよ。喜助さんに作つてもらつた竹とんぼ見せるんだつて。

一彦 なんだよ、俺には見せてくんないのかよ。

とみ ……本当はね、九里子さんみたいな人が、恵五郎さんのお嫁さんになつてくれるといいなつて思つていたんだけど……。

一彦 ……あの人、気にいらぬい？

とみ ……あんなに似ているとね、なんだか、静子が生きていたことが、嘘のようになってしまふ気がして……。

一彦 幹太、憶えてないだろうからな。

とみ ……。一彦君、最近、写真機いじつてないのね。

一彦 ん？ ああ。

とみ ちよつと前までは、近所をぶらぶらしながらよく写真撮つていたのに。

一彦 おもしろかったからね。世の中がどんどん変わつてくのが。

とみ 今は？ 飽きちゃつた？

一彦 変わつてく早さについていけなくなつたのかな。今のうちにあれも撮つておかなきや、これも撮つておかなきやつて、焦つちやつてさ。

とみ でも、そうやつて撮つておけば、あとで貴重な写真として残るでしょうに。

一彦 それもねえ。なんか、形見集めてるみたいでさ。楽しくないのよ。

とみ そう……。

一彦 現像代もおつつかないしね。そう言えば、まだフィルム残つてたかもな。（と奥へ）

歌声とともに喜助が現れる。

喜助 おーもえば ゆーめか とーきの間にー 五十三次ー はーしりきて

ー 神戸のやーどに 身ーをおくもー ひーとにつーばさの 汽ー車の恩
ー。とみさん、お鍋返しに來ました。

とみ あらまあ、わざわざすみません。

喜助 お家、留守だつたから。

とみ お口に合いましたか？

喜助 とつてもおいしかつた。静子さんとおんなんじね。

とみ 私が教えたんですもの。私がいなくなつた後でも、困ることがないよ
うについて。

喜助 じゃあ、静子さん、困つてないね。

とみ ……そだといいんですけどね。親よりも先にいつてしまつて……。

できることなら、代わつてやりたかったんですけど……。

喜助 代わつてあげるよ。

とみ え？

喜助 いつかユキオとね、代わつてあげるんだよ。もう食べ物がたくさんあるからね。恵ちゃんももやしをくれるから。

とみ ……そうですか。喜助さん……そうでしたか。

一彦 （カメラを手に戻ってきて）あ！ 喜助さん、ちょうどよかつた。写真撮つてあげるよ。

喜助 はい！

喜助、その場で直立不動。

一彦 そんなに硬くなんなくてもいいんだけど。

喜助 （力みに力みながら）まだ？

一彦 もつとこう、ポーズをつけたりさ。

喜助 一ちゃん、まだ？

とみ 早くしてあげたら？ 大変そだだから。

一彦 はい、じゃあチーズ。（シャッターを切る）

喜助 （大きくほーとため息をつき）面白かつた！

一彦 ええつ？ そだつた？ ジヤ、おばちゃんも一枚……と、残念！

今まで最後だ。

そこへワンピース姿の十子がどかどかと帰つてくる。

十子 ちよつと、佐々木のおかあさん聞いてよ！ お兄ちゃんたらひどいのよ！ お見合いのあいだ中、ずーっと居眠りしてたんだから！

一彦 （とみに）ほらね？

十子 お仲人さん、呆れて口開けてたわよ！

背広姿の恵五郎が入つてくる。

恵五郎 あれが普段通りの俺なんだからしようがないじやないか。

十子 普段通りにもほどがあるでしょ？

恵五郎 がんばつていろいろ話したつもりだけどなあ。

十子 お見合いの席で「戦後にもやし屋がひろまつた理由」なんて語り出す人がどこにいるのよ！ この調子でたまに目を開けても、もやしの話ばかり！

恵五郎 結構、興味深そうに聞いてなかつたか？ なんだつけ……田淵さん？

十子 樋口さんでしょ！ もうやだ！ あたし、お兄ちゃん縁切りたい！

恵五郎 まあ、そう心配しなくとも、おまえは直に泉家の人に問じやなくなるんだから。

十子 博さんが出世できなかつたら、お兄ちゃんのせいだからね！

一彦 結局そつちの心配かよ。

恵五郎 博さんには、あとで俺からも謝つておくよ。

とみ じやあ……今回はダメだつたの？

十子 当たり前じやない！ もう、お兄ちゃんの馬鹿！ これで博さんとも気まずくなつたらどうしてくれるので？

喜助 トコちゃん、お洋服きれい。

十子 ありがとう喜助さん。この日のためにね、一生懸命縫つたの。

一彦 最後はおばちゃんがね。

十子 うるさい一彦！ 就職決まつたの？

一彦 もー、馬鹿のひとつ覚えみたいに……。

十子 馬鹿はお兄ちゃんなの！

とみ まあまあ十子ちゃん、こういうことはご縁だから……。

十子 お兄ちゃんなんて、もやしと結婚すればいいのよ！

恵五郎 はいはい。じゃあお嫁さんの顔でも見てくるかな。

十子 なによー！ さつきまでグーグー寝てたくせにー！

恵五郎が小屋に入つていこうとすると、中から村松が飛び出してくる。

村松 ああ！ 大変です！

恵五郎 どうしたの？

村松 もやしが腐つてるんです！

恵五郎 どのもやし！

喜助 大変だ！

村松と恵五郎、続いて喜助も小屋の中へ。

十子 居眠りしたバチが当たつたのよ。

とみ これ、いけませんよ。

一彦 僕、フィルム出してこようかな。（と庭に下り、ふと外の方を見て）あれ？ 九里ちゃん、なにしてんの？ あがつておいでよ！

椎茸の載つた笊を手に、九里子がこそそと現れる。

九里子 あの……田舎から椎茸をたくさん送つてきたのですから……。幹

太君に持つて行つてもらおうとしたら、お友達と遊びに行つてしまつて……。

一彦 いつも悪いねえ。

十子 ちよつと九里ちゃん、聞いてよ！

一彦 （うんざりと）えー、また最初からー？

十子 お兄ちゃんは結婚しない、一彦は就職しないじゃ、あたしお嫁に行け
ないわ！

一彦 嘘つけ。這つてでも行くくせに。

九里子 今日、恵五郎さん、お見合いの……。

とみ ダメだつたらしいのよ。もやしの話ばかりしていくて。

十子 ほんと居眠りしてたのよ!! 信じられる?

九里子 それはもう、あつさり信じられますけど……それで、恵五郎さんは?

十子 今、縁結びの神様の罰を受けてるわ。

とみ 十子ちゃん！

一彦 （九里子に）もやしが腐っちゃったみたいでさ。

九里子 ええつ！

小屋の中から、恵五郎、喜助、がつくり肩を落した村松が出てくる。

喜助 よかったね。ちょっとだけだつたね。

村松 すみません。きっと水の温度が高すぎたんです……。

恵五郎 気にすることないよ。あれぐらいならよくあるんだ。下の方はね、
どうしても熱がこもっちゃうから。

村松 僕の不注意です……。

恵五郎 いや、むしろよく気がついてくれたよ。放つておいたら四日目のも
やしが全滅するところだった。

村松 いたら誰だつてわかります。すごい臭いでしたから……。

恵五郎 それでもさ。

喜助 もやしさん、お手柄、お手柄。

十子 村松さん！ 聞いて！

一彦 聞かなくていいよ、村松さん。

十子 一彦も来ればよかつたのよ！ そうしたらあたしがどれだけ恥をかい
たかわかるから！

恵五郎 まだその話か……。

村松 そう言えば、お見合いは……。

恵五郎 うん、嫌われたらしい。

十子 嫌われるようなことをするからでしよう!!

とみ 十子ちゃん、いいかげん落ちついて。

村松 本当にすみませんでした。こんな大事な日に……。

恵五郎 いいからいいから。

喜助 九里子さん、こんにちは。

九里子 こんにちは。幹太君の竹とんぼ見ましたよ。喜助さん、手先が器用なんですね。

一彦 （恵五郎に）椎茸もらつたよ。

恵五郎 ああ、いつもありがとうございます。

喜助 （村松に）もやしさん、大丈夫？ 元気出して。

恵五郎 ほんとだよ？ あんなの失敗のうちにはいらないから。

喜助 （ポケットからくしゃくしゃのハンカチを村松に差し出し）はい。

村松 （丁寧に戻させ）泣いてませんから。

とみ 真面目な方なのね、村松さんは。

十子 いつそ村松さんお見合いしない？ 誠実な人なら誰でもいいらしいから。

村松 僕は誠実な人なんかじやありませんよ。

十子 あら、そうかしら。

村松 ……つまらない嘘もつくし。

とみ 村松さんはきちんとしたい方ですよ。

九里子 そうですよ。

村松 ……こちらのみなさんは……やさしいですね。

一彦 それは勘違いだよ。さつきの姉ちゃんの怒りよう、見たでしょ？

村松 僕は今まで、ミスをした時に……。

恵五郎 ミスなんかじやないよ。事故みたいなもんだ。

村松 ……こんなふうに、慰められたことなんてなかつたですよ。

十子 意外ねえ。ちやほやしてくれる人が周りにたくさんいたんじやないの？

村松 いましたよ……。そんな人しかいませんでした。

とみ ご両親は？

村松 父は「俺が捷だ」という人ですし……。

九里子 お母様は？ 心配なさつていないんですか？

村松 ……心配しています。僕が、父の思い通りにならないことを。

一彦 なんだか息苦しそうだなあ。

村松 とにかく、僕のことをわかつてくれる人間なんていないんです。

十子 あら、ダメよ。そんな寂しいこと言っちゃあ。

九里子 そうですよ。村松さんをわかつてくれる人は必ずいます！

とみ まだ出会っていないだけですよ。

喜助 会えなくともね、どこかにいるよ、きっと。

一彦 それでも会えなかつたらさ、「確かにいたんだよなあ、俺をわかつてくれる人が。とうとう会えなかつたけど」って思えばいいんじゃない？

恵五郎 そんなことより、自分がわかつてあげるよつて誰か名乗りをあげよう。

十子 それもそうね。

一彦 じゃあ、村松さんのことわかつてあげる方、举手をお願いします！

村松以外の全員、手を挙げる。

村松 （苦笑）……ありがとうございます。

喜助 （村松に）よかつたね。

十子 でも、なんで会社継ぐのがイヤなの？ わからぬわあ。

一彦 姉ちゃん！ 満場一致が台無しだよ。

喜助 それじやあ、行きます。

恵五郎 帰るの？ もやし持つていかない？

喜助 うん、いらない。

恵五郎 腐つてないやつだよ？

喜助 ありがとう。いい！

恵五郎 そう？

とみ それじや私も。（と立ちあがる）

一彦 あ！ 俺も。ファイルム出しにいくんだ。ちょっと待つて。

喜助 先に行く。

一彦 待つててよ。財布取つて来るだけだからさ。

喜助 先に行くよ。とみさんも一ちゃんもね、あとからゆつくり来て？

とみ そうですか？

喜助 さようなら。

全員、口々に喜助に別れを告げる。

喜助は「鉄道唱歌」を歌いながら帰つて行く

喜助 明一けなば さーらに乗一りかえてー さーんようどうをー すーす
まましー てーんきは あーすも 望みーありー やーなぎに かーすむ
つーきのかげー。

一彦 ……用事でもあるのかな？

とみ さあねえ……。

恵五郎 着替えてこよう。（と奥へ）

十子 あたしも。（と恵五郎に続く）

恵五郎を目で追つていた九里子、村松と目が合い、微笑みかける。

ゆつくりと暗転。

曇天の下の泉家。

井戸の脇の洗い場で、村松がタワシで桶を洗っている。
そこへ九里子が現れる。

九里子 ここにちは。なんだかすつきりしないお天気ですね。ひと雨降りそ
う。

村松 みなさん、お出掛けですよ。

九里子 そうですか。あ、それ、あたしも洗います。

九里子も桶を洗い始める。

九里子 村松さん、このひと月ですっかりお仕事に慣れたみたいですね。

村松 相変わらず、夜中は寝ています。

九里子 だつてその証拠に、恵五郎さん、こうして安心してお留守を任せて
らつしやるじゃないですか。

村松 そうだといいんですが……。

九里子 そうに決まっていますよ。

村松 ……僕なんかに仕事を任せなきやならないほど、状況が厳しいのかも
しがれません。

九里子 状況つて？

村松 練炭をバーナーに換えることすら苦しいってことです。

九里子 ……そうなんですか？

村松 学校給食のような大口は、値段を下げないと取引が難しくなつていて
みたいです。おまけに、最近はこの辺りも下水道が完備されて、それに伴
つた水道料金が掛かる。

九里子 ……どうしたらいんでしょう？

村松 住込みの従業員を雇う余裕は、もうないのかもしません。

九里子 そんな……。

村松 手つ取り早いですからね。人件費の節約は。……ただ、それも応急処置でしかないとは思いますけれど。

九里子 恵五郎さん、もやし屋をやめたりしないですよね？

村松 ……赤字を生むためだけの経営では、商売の意味がありません……。

九里子 あたし、困ります！

村松 ……。

九里子 ……あたしというか……うちの店が困ります……。

そこへ「ごめんください」という声とともに、かつちりとしたスースーに身を包んだ樋口八重（とみ・静子と三役）が姿を現す。

九里子 あ……。

八重 こちらは泉さんのお宅ですか？

村松 樋口……さん？

八重 ……。わたくしのことをご存じなんですね。あなたは？

村松 こここの従業員で、村松です。

八重 村松さん。（九里子に）あなたは？

九里子 高野といいます。あたしは……ただのお手伝いです……。

八重 樋口八重です。（村松に）わたくしのことを、他にもなにか？

村松 先日、恵五郎さんとお見合いを……。

八重 他には？

村松 誠実な方をお探しだと……。

八重 その理由も？

村松 ……男運がないと……。

九里子 村松さん！

八重 大変正確な情報です。借金まみれの博打打ちやら、大酒のみの浮氣者にしか、これまで縁がありませんでした。

村松 あの、恵五郎さんでしたら、今、出かけていて……。

八重 結構です。突然で申し訳ないんですけど、もやしを見せていただけませんでしようか？

村松 もやし？

八重 ええ。こちらで作つていらっしやるとか。

村松 ……もやしを、ご覧になりにいらしたんですか？

八重 そうです。お差支えがなければの話ですが。

村松 お差支えは……ありません。こちらです。どうぞ。

村松、八重を小屋に案内すると、すぐに一人で戻つてくる。

九里子 どういうことでしょうか？

村松 わかりません。一人にしてくれつて。

九里子 本当に、静子さんにそつくり……。

村松 お見合いで居眠りされたことに腹を立てて仕返しにきたんでしょう

か？ だつたら一人にさせちやますいなあ。

九里子 やつぱり、恵五郎さんと結婚する気になつたとか……。

村松 それで現場の視察に？

九里子 他に考えられますか？

村松 うーん……。

八重が小屋から出てくる。

八重 ずいぶん蒸し暑いところなんですね。

村松 もやしには最適なんです。ゴキブリがいませんでしたか？

八重 ……気づきませんでした。なにしろ暗くて。

村松 よく出るんですよ。たまにネズミとか。

八重 そうですか。

村松 あんなところで長時間、長靴を履いていますから、足が臭くなります。

水仕事なので、すごく手も荒れますし。

八重 大変なお仕事のようですね。

村松 ええ。夜中も働きづめで寝る暇もありませんし。

八重 よくお体が持ちますね。

村松 僕は寝ていますが……。

八重 そうですか。

村松 おまけにまたたく儲かりません。こんなうちに嫁いできたら大変です。

八重 ……なにか、誤解なさっているんじやありません?

村松 え?

八重 わたくし、本当にもやしを拝見しに来ただけですから。お忙しいところ、ありがとうございました。

九里子 あの……!

八重 はい?

九里子 いかがでしたか? もやしをご覧になつて。

八重 ものすごく期待してきたんですが……正直、それほどでも。

村松 期待?

八重 泉さんがおっしゃっていたんです。もやは、天候に影響されず、町なかの小さな狭い場所でも短期間に育てることができる。だから、都心の人たちにも、新鮮な野菜を安定供給できるよう広まつた素晴らしい食べ物だと。安くておいしい食事のためにぐんぐん育つもやしを見ていると、イヤなことなんてきれいさっぱり忘れると伺つたものですから。

村松 忘れたい、イヤなことがおありなんですか?

八重 ええ。女性が男性と対等に働くとすれば、それはもううんざりするほど。

九里子 忘れられませんでしたか?

八重 残念ながら。

九里子 そうですか……。

八重 あなたは？

九里子 はい？

八重 高野さんでしたね。あなたには、もやしの素晴らしさがおわかりになる？

九里子 あたしは……おいしいなって思う程度で、素晴らしきなんてわかりませんし、恵五郎さんがどうしてあれほどもやしを大事にできるのかもわかりません。でも……。

八重 でも？

九里子 ……恵五郎さん……泉さんが、どれほどもやしのことを大事に思つているのかは、わかっているつもりです……。

八重 ……お邪魔いたしました。どうぞお仕事にお戻りください。

村松 なんのお構いもしませんで。

八重 （帰ろうとして、ふと）あとから聞いたことですけど、わたくしのこの顔、泉さんの亡くなつた奥様にそつくりだそうですね。

村松 僕らは、奥さんのことはよく知らないんですが……。

八重 迷惑な話です。

村松 はあ……。

八重 わたくしにも、亡くなられた奥様にも。

村松 それはまあ……そうかもしませんね。

八重 ……泉さんは、ずっと居眠りなさつていました。

村松 伺っています。

八重 たまに目を開けてもやしの話をなさる時も、わたくしの顔を見ないよう見ないようになさつっていました。

村松 それは……初めて伺いました。

八重 ……誠実な方だと思いました。

間。

八重 残念です。わたくしは本当に男運がなくて。

村松 ……あの……室の中で、なにか聞こえませんでしたか？

八重 はい？

村松 聞いているうちに、なんだかこう、少しだけ気持ちが落ち着くような……とても小さな音なんですけど……。

八重 いいえ、なにも。本当にありがとうございました。失礼いたします。

凜々しく帰っていく八重の後ろ姿を見送る村松と九里子。

九里子 （空を見上げ）あ……雨。

慌てて桶を片付け始める二人。

そこへ電話が鳴る。

村松 （桶を運びながら）すみません、九里子さん。出ていただけますか？

九里子 はい！

九里子、茶の間にあがつて受話器を取る。

九里子 はい、泉商店です。……ああ、町内会長さん。九里子です。今、ちよつとお留守番を……ええ。……はい。……え？

村松、軒下に駆け込んできて、雨の霖を払う。

九里子 ……え……だつて……。ええ？

村松 （九里子の様子がおかしいのに気づいて）どうしました？

九里子（受話器を押さえ、呆然と）……喜助さんが……。

雨の音。

暗転。

七

暗闇の中で、帽子をかぶり、長靴を履いた若き日の恵五郎がしゃがみこんでいる。

暗闇の奥から、喜助が姿を現す。

喜助 水遣り終わつた？

恵五郎（ふてくされた様子で）終わつたよ。

喜助 ……どうしたの？ 恵ちゃん。

恵五郎 なんだか馬鹿馬鹿しくなつちやつてさ。なんでもやしの生活に合わせてこんな苦労しなきやならないんだよ。

喜助 こうやつて面倒見てあげなきや、もやしは大きくなれないんだもの。

恵五郎 なんで俺、店を継ぐなんて言つちやつたのかなあ。他にやりたいこといっぱいあつたのに。大体、こんなに蒸し暑いところでこんなに長靴履いてたら、足が臭くなつちやうよ。

喜助 もやしが嫌いになつちやつたの？

恵五郎 もうイヤだよ。もやし作りなんて。

喜助 ……恵ちゃん、こつちきてごらん。

恵五郎 なに？

辺りが闇に包まれ、その中から「鉄道唱歌」をゆっくりと奏でるギタ

一の音が聞こえてくる。

夜。泉家の茶の間では、恵五郎が一人、ギターを弾いている。

そこへ喪服姿の一彦と村松が帰つて来る。

恵五郎 おかれり。

一彦 「てつきり眠つてゐるのかと思つた」つて言つてたよ、公園で最初に見つけた人。まったく喜助さんらしいよな。

恵五郎 誰かを待つてたのかな。

一彦 さあねえ。

村松 （恵五郎に）礼服、お借りしてしまつてすみませんでした。

恵五郎 いいんだ。水遣りがあつたし、俺は明日の葬儀の方に出るから。一彦、手紙来てるぞ。

一彦 どこから？

恵五郎 なんとか株式会社。

一彦 （ちやぶ台の上にあつた手紙を開封し、中身に目を通して）ちえつ。

村松 なんでした？

一彦 （手紙を見せて）「内定を通知す」。

村松 ああ、おめでとうございます。

一彦 ……なんだよ、よりによつてこんな日に。デリカシーに欠けるねえ。姉ちゃんとおんなじだ。

恵五郎 ちゃんと大学卒業しろよ？

一彦 ……。村松さん、飲みに行こうよ！

村松 え？

一彦 送別会だよ。さらば喜助さん！ さらば、我が青春時代！

村松 え……でも……。

恵五郎 行つておいでよ。

村松 じゃあ、着替えてから。

一彦 いいよ、そのままで。俺ひとり喪服じやカツコ悪いじやん。

村松 一彦さんも着替えればいいじゃないですか。

一彦 だつて悲しいお別れ会よ？ いいんだよ、この格好の方が。いいよね？
兄ちゃん。

村松 ですけど……。

恵五郎 いいよ。行つておいで。

一彦 ……俺さ、兄ちゃんみたいにはなりたくないって思つてたんだ。

村松 ……なにを言い出すんですか、藪から棒に。

一彦 ほんとだよ。ずっと思つてた。大学もあきらめて親父の跡継いで、寝る暇もなくもやしの世話ばかりしてる兄ちゃんみたいな人生は真っ平だつて。

村松 一彦さん、もう酔つ払つてるんじや……。

恵五郎 知つてるよ。

一彦 ……知つてたか。

恵五郎 うん、知つてたよ。おまえ、寝言でも言つてたし。

一彦 そうか……。

村松 一彦さん、それはあんまりなんじやないですか？ 恵五郎さんが一彦さんや十子さんのためにどれだけ……。

一彦 だからさ、そういう誰かの犠牲になる生き方なんて、俺にはできないなつて。

恵五郎 やらなきやいいさ。

一彦 だからつてサラリーマンになるのも気がすすまなくてなあ。

村松 だけど、こうして内定も貰えたわけだし……。

一彦 命令通り歯車になつて働いてれば、生活は保証される。兄ちゃんの代わりに、今度は会社が守つてくれるつてわけだ。それつてどうなの？

恵五郎 だつたらカメラマンでもなんでも目指せばいいだろう。

一彦 僕にそんな才能はない。

恵五郎 それぐらいの分別はあるんだなあ。

一彦 とにかく！ 僕は兄ちゃんみたいになりたくないの！

村松 一彦さん！

一彦 でも兄ちゃんには、今までいてほしいの！

村松 言つてること無茶苦茶ですよ！

一彦 ……もやし屋やめるなよ。

村松 え……？

一彦 僕はもう、もやしなんて食べ飽きてるからいいんだよ。けど、喜助さんが……。

惠五郎 ……一彦。

一彦 だつて喜助さんは、もやしが大好きだつただろ？

惠五郎 おまえ、いくつになつた？

一彦 ……年男。

惠五郎 十二歳か。

一彦 掛ける倍だよ。

惠五郎 いつまで兄ちゃんに甘えてんだ。

村松 ……今のは、甘えていたんですか？

惠五郎 そうだよ。

村松 なんて複雑な甘え方なんだ……。

惠五郎 一彦は甘つたれの寂しがりでね。だから喜助さんは、誰よりも一いつつを可愛がつてたんだ。

一彦 幹太にとつて代わられたけどね。

惠五郎 ……やめないよ。

惠五郎、ギターの弦を爪弾く。

惠五郎 やめないよ、もやし屋。せめて幹太が大きくなるまではね。……だ

から一彦は新しい場所で、やりたいことやつてみろ。

一彦 会社でやりたいことなんてないよ。

惠五郎 行つたこともないくせに。

一彦 就職した奴らを見てればわかるよ。あいつらはなにも考えてない。そ
うでなきや、あんな人殺しみたいに混んでる電車に毎日乗れるわけがな
いんだ。

恵五郎

満員電車に乗りたくないだけじゃないのか？

一彦 ……俺はさ、ずっと考えてたんだよ。

間。

一彦 どうして喜助さんはあんなふうになつちやつたのか、ずっと考えてた
んだ。子どもを亡くしたせいだつてのはわかる。それが戦争のせいだつて
のもわかる……。そこから先なんだよ。でもみんな、あれは不幸な過去だ
つたから忘れようつて言うだろ？ なんでだよ？ ジやあそれができない
人はどうすんだよ？ 忘れられなかつた喜助さんが悪いのかよ！ わかん
ないよ！

恵五郎 わかるよ。

一彦 なにが！

恵五郎 おまえが、喜助さんを好きだつたつてことだけはわかる。

一彦 ……俺にはまだわからないんだ。だから、言われたことだけやるよう
な仕事について、これ以上頭が悪くなるのは困る。

恵五郎 それは俺も困るなあ。

村松 ジやあ、就職はしないんですか？

一彦 するよ。兄ちゃんに今までの借りを返きなきやならないからね。頼ん
で作つた借りじやないけど。

恵五郎 いよいよダメだつたら、もやしを手伝つてくれればいいよ。

一彦 チクショー、絶対出世してやる！ 齒車になんかならないぞ。

村松 会社の中にだつて、一彦さんが一彦さんらしくいられる場所がありま
すよ、きっと。

一彦 村松さんとこの会社はどうなの？

村松 え？

一彦 自分らしくいられる場所があるの？

村松 それは……。

一彦 あるんなら入れて。

恵五郎 飲みにいくんじゃないのか？ 店、閉まつちやうぞ？

一彦 じや、続きは飲み屋でゆつくりと。

恵五郎 つきあわせちゃって悪いね。松村さん。

村松 ……いいえ。

恵五郎 ……今、俺、ちやんと名前言えた？

一彦 言えたよ。いつも通り「松村さん」で。

恵五郎 （半紙を見てから）本当にごめん。いい加減、怒るよね？

村松 いいんです。

恵五郎 いや、よくないよ。

村松 いいんですよ。「松村」で。

そこへ喪服姿の九里子がハンカチで鼻を押さえながら入ってくる。

一彦 あれ？ 他のみんなは？

九里子 まだお通夜のお手伝いを……。あたし、泣いてばかりで役に立たないから、荷物を持って帰るように言われて……。

一彦 これからお別れ会だけど、九里ちゃんも来る？

九里子 いいえ、あたしは。

一彦 じゃあ行つてくるね。

村松 ……いってきます。

九里子 いってらっしゃい。お気をつけて。

一彦と村松、揃つて出かけていく。

九里子 とても大勢の方がおみえになつていきました。子どもたちもたくさん……。

恵五郎 喜助さん、人気者だつたからね。

九里子 あの遺影、一彦さんが撮られた喜助さんの写真……つい先週のものですね？ あたし、どうしてもまだ信じられなくて……。

恵五郎 ……九里子さん。

九里子 はい……。

恵五郎 もやし見に行こうか。

九里子 え？

恵五郎 ……うん、行こう。

九里子 恵五郎さん、あの……。

恵五郎 おいで。

恵五郎の後について、九里子も小屋に入つていくと、辺りの景色も小屋の中の闇に包み込まれるように暗くなる。

やがて、暗闇の中に恵五郎と九里子の姿が、ようやくそれとわかる明かりの中に現れる。

恵五郎 足元、気をつけてね。滑りやすいから。

九里子 あたし、室の中まで入つたのは初めてかもしません。

恵五郎 あれ？ そうだつた？

九里子 ええ。……本当に蒸し暑いんですね。もやしが熱を出してるから？

恵五郎 十子が言うには、「運動部員の男子でいっぱいの満員電車にいるようだ」つて。

九里子 確かにそんな感じもします。

間。

九里子 ……静かですね。

恵五郎 うん。

九里子 ……？ なにか……音がします。

恵五郎 うん。もやしの音だ。

九里子 もやしの？

恵五郎 もやしが育っている音だよ。水を吸って、ひしめき合いながら大きくなっていく音が、こんなふうに聞こえるんだ。

九里子 もやしの、音……。

恵五郎 夜の方がね、よく聞こえる。これが聞きたくて、松村さんには夜中の水遣りを譲れなかつた。

九里子 ……「村松さん」ですよ？

恵五郎 ……どうしても覚えられない。

九里子 ひっくり返すだけなのに。

恵五郎 だつて彼、「松村」って顔してると思わない？

九里子 なんとも言えません……。

恵五郎 僕だけか……。

九里子 ……恵五郎さんはいつも、この音を聞いてらしたんですね。

恵五郎 そう、いつもね。家族が増えた時も、いなくなつた時も、いつもいつもここにいて、この音を聞いてたな。

九里子 イヤなことも、きれいさっぱり忘れられる……。

恵五郎 ……話したことあつたつけ？

九里子 いえ……。

恵五郎 最初はね、イヤだつたんだ。こんな仕事。

九里子 え……？

恵五郎 大学にも行きたかつたし、ギターの勉強もしたかつたけど、親に泣

きつかれて仕方なく始めたんだ。だから文句ばっかり言つてたんだよ。：

：だけど喜助さんが、「歌つてるよ」つて……。

九里子 歌つてる？

恵五郎 「恵ちゃんが一生懸命育ててくれるから、嬉しくてもやしが歌つて
るんだよ」 つて。

九里子 ……そうですか……。

恵五郎 喜助さんがね……教えてくれたんだ。

もやしを育てるその闇が、ゆっくりと一人を包む。

八

泉家の茶の間。

恵五郎が手にした一枚の名刺を覗き込むようにしながら、十子、一彦、九里子、とみが身を乗り出している。

村松は少しうつむきがちに正座している。

恵五郎 （名刺を読む）「株式会社、松村電器、専務取締役……さちお松村幸雄」。

村松 ……ユキオです。

恵五郎 ああ、ごめん。

一彦 松村電器って、あの松村電器？

とみ 一彦君、知ってるの？

一彦 就職希望者の憧れの的。超のつく一流企業だよ。

十子 冷凍冷蔵庫とか電気洗濯機とか電気炊飯器とか、オーブントースターとかクーラーとかカラーテレビとか……

一彦 いつまで続くんだよ。

十子 電気掃除機とか電気カーべットとか魔法瓶を作っている、あの松村電

器？

村松 ……魔法瓶はうちじやありません。

九里子 ……それで、本当のお名前は「松村」さんなんですか？

村松 そうなんです。

十子 本当につまらない嘘をついていたのね。

村松 逃げたかったんですよ、「松村」の名前から。この十年でみるみる大きくなってしまった会社の看板を、僕には背負いきれない気がして。

一彦 僕がいつしょに背負つてあげてもいいけど。

とみ 恵五郎さんは間違つていなかつたのね。

村松 （頷き）何度も言つても「松村松村」って。しつこく責められている気がしました。いつまでそうやつて逃げ回つているんだって。

恵五郎 悪いことしたね。そんなつもりはこれっぽっちもなかつたんだけど。

十子 ダメね、お兄ちゃん。悪気がないっていうのはね、一番タチが悪いのよ？

恵五郎 （やや驚いて）おまえに言われるとは思わなかつたよ……。

とみ それで……いつお帰りに？

村松 明日……もやしの出荷が終わつたら。

恵五郎 幹太が寂しがるよ。将棋の相手がいなくなつて。

一彦 僕がいるだろ？

恵五郎 ……気を遣わずに、将棋を指せる相手がいなくなつて。

九里子 どうして、帰ろうつて思つたんですか？

村松 ……これ以上、両親や会社の人間を困らせるのも大人気ないし、それになつ。

十子 ねえ、結婚式には是非出席して！ ご祝儀はね、オープントースターでいいから！

一彦 （村松に）悪気はないんだよ。一番タチが悪いんだ。

十子 いいでしょ？ 村松さん！

とみ 「松村さん」でしょう？

十子 いいわよね？ もうどつちだつて。

村松 ええ。もう大丈夫です。どつちだつて。

とみ （立ちあがり）それじゃあ今夜はごちそうを作らなきやね。ほら、十

子ちゃん、手伝つて！

十子 あたし、佐々木のおかあさんのちらし寿司が食べたい！

とみ あなたが食べたいもの作つてどうするの？

とみと十子は台所へ。

一彦 そうだそだ！ 忘れないうちに。（と奥へ）

九里子 （腕を組んでうつむいている恵五郎に） 恵五郎さん……？

恵五郎 うん、起きてるよ。

九里子 まあ、珍しい。

村松 本当に申し訳ありません。突然辞めるなんて言い出して。

恵五郎 ……氣を遣わせちゃったんじやないのかな。

村松 え？

恵五郎 住込みの人ひとりぐらいは、まだなんとかなるんだけどね。

村松 ……でしたら是非、散水機を導入してください。

恵五郎 そうだな……。

村松 あまり無理をしないでください。

恵五郎 そっちこそ、慣れない仕事でつらかったるに。

村松 ……工業機器を扱っているところなら、いくらでも知っています。

恵五郎 いろいろ心配もしてくれて。

村松 多少の融通もきます。

恵五郎 うれしかつたよ。

村松 僕に出来ることがあつたら。

恵五郎 ありがとう。

九里子 松村さんは、社長さんになるんですか？

村松 将来的には……多分……。

九里子 電化製品はこれからどんどん売れるでしょうし、松村さん、大変ですね。

村松 ……そんなことを言われると、また肩の荷が重くなります……。

恵五郎 きっと松村さんは、いい経営者になると思うよ。

九里子 あたしもそう思います。

村松 自信ないですよ。あのワンマンな父親と、一緒にやつていけるかどうか。

か。

九里子 喧嘩になつたら、お化けの話をすればいいんですよ。

村松 絶対イヤです！

恵五郎 なんだ、松村さん、お化けが怖いの？

村松 いないものなんて怖くありません！ ……父のことだつて、怖いとか嫌いってわけじゃないんです。ただ、父の猛烈な仕事ぶりや、熱気にあふれた社内の雰囲気に、僕はついていけなかつた……。新しくて便利なことを理由にしたこの勢いが、もしかしたら、古いものをすべて壊していくんじゃないかつて……空恐ろしい気がしてきて……。^{そら}

恵五郎 松村さんはそんなことしないよ。

村松 どうでしようか……。

恵五郎 だつて、もやしの音が聞こえるんでしょ？

間。

恵五郎 あんな小さな音に耳を傾けられる人は、大事なものを無闇に壊したりなんてしないよ、きっと。

村松 ……。

九里子 みんながよろこぶいいものをたくさん作つてくださいね。

村松 （受け止めて）頑張ります。……けど……。

九里子 けど？

村松 そんなに朗らかにお願いされたら「頑張ります」としか言えませんけど……難しい注文だな。……喜助さんは、気にも留めてくれませんでしたからね。

九里子 喜助さん？

村松 買物に誘われても、あっさり断つてた。……「売っているものしか買えないから」って。

九里子 あ、覚えてます。「もやし見てる方が楽しい」って。

村松 ……「買うに値するものなんか売っていない」。そう言われたような気がしました。

恵五郎 厳しいお客さんだ。

村松 だとしたら、これから本当にいいものを作っていくしかありません。じやあいいものとはなんなのか、それを僕らは、いつでも問い合わせなければならぬ。

恵五郎 骨が折れるね。

村松 （苦笑まじりに頷いて）世の中の人がみんな十子さんみたいだつたら、商売も楽なんですけど。

恵五郎 世の中の人がみんな十子か……。

村松 ……ちょっと、賑やかですかね。

恵五郎 恐ろしく賑やかだろう……。

一彦 （一枚の写真を手に戻ってきて）ほら、村松さん！

一彦 ああ、松村さん

か。ややっこしいな、もうユキオでいいや！

恵五郎 どうしてそこで呼び捨てになるんだ。

一彦 これ持つていきなよ。先月、九里ちゃんと撮った写真。（九里子に）九

里ちゃんには今度、焼き増ししてあげるね。

恵五郎 （写真を見て）ずいぶんしょんぼりした顔で写つてるね。

一彦 僕の腕のせいじゃないからな。ほら、九里ちゃんはいい顔で撮れてるだろ？

村松 ありがとうございます。いい記念になります。

九里子 この時の松村さん、可愛かったですよ。小さい子どもみたいで。

村松 ……。

九里子 ごめんなさい。失礼なと言つちゃつた……。

村松 いいんです。小さい子どもだつたんです。

一彦 そうだ、記念写真撮ろうか？（恵五郎に）三脚どこだつけ？

恵五郎 （寝て いる）

一彦 兄ちゃん！ 三脚は？

恵五郎 ……知らないよ。

一彦 ちよつと探してよ。

恵五郎 （立ちあがり）どうせ押入れかどつかだろ。（と奥へ）

一彦 あ！ 幹太がいない！

九里子 あたし、公園まで呼びにいってきます。（と外へ）

一彦 頼むね！ 姉ちゃん！ おばちゃん！ 写真撮るよ！（と台所へ）

一人残された村松、写真を見つめる。

暗転。

九

蝉の声。

十数年後の夏の泉家。

もやしの小屋は工事用のシートに覆われている。

茶の間の半紙が貼られていた場所には、男物のリクルートスーツが掛かっている。

背中がすっかり曲がつて小さくなつてしまつたとみが繕い物をしている。

そこへ電話が鳴り、奥の部屋から恵五郎が入つてくる。

恵五郎 （電話に出て）はい、泉商店です。ああ、こんにちは。……ええ、

そうなんです。長い間、ありがとうございました。引継ぎの業者は先日、ご主人の方に……。はい。

台所からエプロン姿の九里子が入ってくる。

恵五郎 わざわざご丁寧にどうも。はい、お店のみなさんにもどうぞよろしく。失礼します。（切る）

九里子 （とみに）おかあさん、もうじきお昼ごはんですよ。

とみ ありがとうございます、静子。

恵五郎 九里子ですよ、お義母さん。

九里子 いいんですよ。静子でも九里子でも、お好きな名前で呼んでいただければ。

上等なスーツに身を包んだ松村が庭に姿を現す。

松村 こんなには。

恵五郎 やあ、ひさしぶり。

松村 近くまで来たものですから。とみさん、ご無沙汰しています。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

九里子 もうすぐ一彦さんもみえますよ？ よろしければ、お昼ごいっしょにいかがですか？

松村 すぐ戻らなければいけないんですよ。

九里子 お忙しいんでしょう？ 社長さんともなられると。

松村 まだ副社長ですから。

ワイシャツにネクタイ姿の一彦が玄関から現れる。

一彦 なによ、外のあのでつかい車！（松村に気づき）ユキオさんか。

松村 どうですか？ お仕事の方は。

一彦 相変わらず本音と建前を使い分けろって怒られどおしだよ。もうすぐ四十になるつてのにさ。

十子 （玄関から現れ）なあに？ あの立派な車！ あら、村松さん！ ちようどよかつた。うち、電子レンジ買おうと思つてるんだけど、今、買い時？ もつといいのが安く出るかしら？

松村 さあ、その辺は僕にはちょっと。

一彦 「松村さん」だよ。世界の松村電器だぞ？

十子 （一彦に）あなた、外回りの度に実家でごはん食べるのやめなさい。

お家で多恵子さん、泣いてるわよ？

一彦 笑つてるよ、家の奥方様は。テレビ見ながらグラグラね。

十子 九里ちゃんが迷惑でしょ？

九里子 怖いたものありませんから。

恵五郎 （十子に）おまえはなにしに来たんだ？

十子 佐々木のおかあさん、こんにちは。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

十子 あたしよ、おかあさん。

とみ あら、十子ちゃん。お嬢ちゃんの浴衣、出来ていますよ。

十子 ありがと。下の子の方も？

一彦 どつちが迷惑だよ。

松村 （シートに囲まれた小屋を見て）お店、とうとう畳まれるんですね。

恵五郎 あの小屋ももう寿命でね。湿気で柱がダメになつてた。

松村 残念ですね。

九里子 近頃、よそでもやしを買つたりしますけど、やつぱりね、あんなにおいしくないですよ。

恵五郎 散水機とか梱包の機材とか、松村さんにはいろいろお世話になつたのに申し訳ないね。

松村 いいえ、たいしたお力にもなれなくて。

恵五郎 知り合いのもやし屋を手伝うことにしたよ。水撒きも温度管理も機械がやってくれる、大きいところだけね。

一彦 兄ちゃんは結局、一生もやし屋か。

十子 ねえ、幹太は？ 就職、決まったの？
九里子 まだなんですよ。やっぱりミュージシャンになりたいなんて言い出して。

一彦 わかるなあ。学生最後の夏休みを、こんなスーツ着て会社なんか回つてられるかつていうんだよ。

恵五郎 余計なこと吹きこむなよ？

松村 よかつたら、うちも受けるように言つてくださいよ。来年は新卒の枠を大きく増やしていますから。

十子 あら！ 社長のお墨付き？ いいじゃない！

松村 まだ副社長ですけど。

小屋の方から、取り壊しの始まる音。

とみ以外の全員が、一瞬、その音に意識を向ける。

恵五郎 ……始まつたな。

松村 （腕時計を見て）もう時間だ。それじゃあ、僕はこれで。

九里子 いつでもいらしてくださいね。

恵五郎 待つてるよ。

十子 今度うちに遊びに来て？ 冷蔵庫の調子がおかしいのよ。

一彦 そんなこと副社長に頼むなよ。

松村 （とみに聞こえるように）とみさん、失礼します。

とみ ……あら。村松さん？

松村 そうですよ。

とみ まあまあ、ずいぶんご立派になられて。

松村 また来ますからね。

とみ

(独り言のように) ……みーんな変わつてしまつたわねえ……。

松村 それではみなさん……、

とみ (やはり独り言のように) 変わらないでも、よかつたのにねえ……。

間。小屋のシートの向こうからは、立て壊しの音。

一彦 ……そうかもね。

玄関の扉が開く音に続いて元気な青年の声。

幹太 (声だけ) ねー! 外のあのでつかい車なにー?

恵五郎 こら幹太! 帰つてきたら「ただいま」だろ。

十子 (松村に) もうね、団体ばっかり大きくなっちゃつて。

松村 じやあ顔だけ見ていこうかな。

一彦 (玄関の方に向かって) オイ、なんだよおまえ、ミュージシャンにな
りたいんだって?

九里子 (とみに) さあおかあさん。お昼ごはんにしましようね。

工事の続く音。セミの声。

和やかな表情の人々に、ゆっくりと幕が降りてくる。

終